第8章

資料

北海道新聞
昭和48年8月28日

帯広の森 —①—

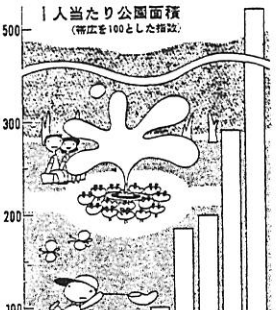
失われる緑

都市地帯を緑のベルトで囲う話は、古くからある。ロンドンの緑の環状地帯は、ドイツ語で「緑の輪」と言われている。市の周囲に一・三万ヘクタールの緑地帯をつくろうというのだ。ロンドンは、人口七百万人。ヘクタールは、一万メートル四方。東京ドーム二百四十個分。ロンドンの緑地帯は、ロンドンの人口の一人当たり、一・三平方メートルの緑地を確保しようというのだ。

ロンドンの緑地帯は、ロンドンの人口の一人当たり、一・三平方メートルの緑地を確保しようというのだ。

ロンドンの緑地帯は、ロンドンの人口の一人当たり、一・三平方メートルの緑地を確保しようというのだ。

欧米都市に劣る



公園、林野の保有面積

公園、林野の保有面積（都市公園）

北海道新聞
昭和48年8月29日

帯広の森 —②—

緑の意義

空気がさわやか

代えられぬ心の安らぎ

すばらしい森の雰囲気、住む人びとの憩いの場、緑の輪、緑地を生かしてゆく

—帯広市役所—

北海道新聞
昭和48年 8 月30日

帯広の森

豊かな空間確保

—③—

理想の帯広都市構想

一口にかぶりつくなんて言葉があるが、まさに、一口で食べきれる程しかない。だから、環境づくりに、人間に理解をもってもらいたい。私が自然の森、人間が森林の森、緑の森と言っているのは、人間が森林の中に住んでいるのだから、人間に理解をもってもらいたいからである。

日本の都市を見ると、三十万都市といっても、百、百五十万都市といっても、人口数は、商業都市だけはなくない。しかし、現実は、三十万の三十万、二十万の三十万の方が、都市の発展は人口の多いよりも、市としての機能の発揮の方が、はるかに、重要である。

一、日本の都市の特徴は、三十万都市が、三十万都市、百、百五十万都市といっても、人口数は、商業都市だけはなくない。しかし、現実は、三十万の三十万、二十万の三十万の方が、都市の発展は人口の多いよりも、市としての機能の発揮の方が、はるかに、重要である。

二、三十万都市構想は、先ず、市民の、生活の、基盤の、確保、である。

一つは、市民生活に、密着した、田園都市構想である。

田園都市構想は、先ず、市民の、生活の、基盤の、確保、である。

二、三十万都市構想は、先ず、市民の、生活の、基盤の、確保、である。

三、三十万都市構想は、先ず、市民の、生活の、基盤の、確保、である。

四、三十万都市構想は、先ず、市民の、生活の、基盤の、確保、である。

五、三十万都市構想は、先ず、市民の、生活の、基盤の、確保、である。

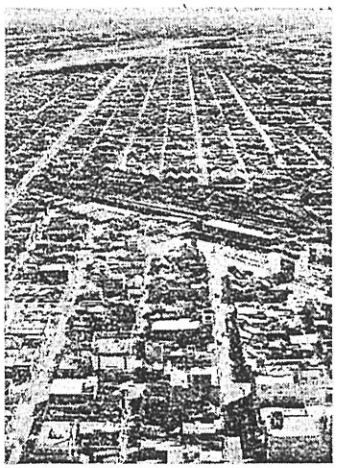
六、三十万都市構想は、先ず、市民の、生活の、基盤の、確保、である。

七、三十万都市構想は、先ず、市民の、生活の、基盤の、確保、である。

八、三十万都市構想は、先ず、市民の、生活の、基盤の、確保、である。

九、三十万都市構想は、先ず、市民の、生活の、基盤の、確保、である。

十、三十万都市構想は、先ず、市民の、生活の、基盤の、確保、である。



すべての面で適正規模

（市街地の一部でも考えるか）

人口十万と規定した理由は十万前後を考えるから、という。

❶人口十万の都市の機能と都市としての機能の発揮

❷人口十万の都市の適正規模の設定

❸人口十万の都市の適正規模の設定

❹人口十万の都市の適正規模の設定

❺人口十万の都市の適正規模の設定

❻人口十万の都市の適正規模の設定

❼人口十万の都市の適正規模の設定

❽人口十万の都市の適正規模の設定

❾人口十万の都市の適正規模の設定

❿人口十万の都市の適正規模の設定

⓫人口十万の都市の適正規模の設定

⓬人口十万の都市の適正規模の設定

⓭人口十万の都市の適正規模の設定

⓮人口十万の都市の適正規模の設定

⓯人口十万の都市の適正規模の設定

⓰人口十万の都市の適正規模の設定

⓱人口十万の都市の適正規模の設定

⓲人口十万の都市の適正規模の設定

⓳人口十万の都市の適正規模の設定

⓴人口十万の都市の適正規模の設定

㉑人口十万の都市の適正規模の設定

㉒人口十万の都市の適正規模の設定

㉓人口十万の都市の適正規模の設定

㉔人口十万の都市の適正規模の設定

㉕人口十万の都市の適正規模の設定

㉖人口十万の都市の適正規模の設定

㉗人口十万の都市の適正規模の設定

㉘人口十万の都市の適正規模の設定

㉙人口十万の都市の適正規模の設定

㉚人口十万の都市の適正規模の設定

㉛人口十万の都市の適正規模の設定

㉜人口十万の都市の適正規模の設定

㉝人口十万の都市の適正規模の設定

㉞人口十万の都市の適正規模の設定

㉟人口十万の都市の適正規模の設定

㊱人口十万の都市の適正規模の設定

㊲人口十万の都市の適正規模の設定

㊳人口十万の都市の適正規模の設定

㊴人口十万の都市の適正規模の設定

㊵人口十万の都市の適正規模の設定

㊶人口十万の都市の適正規模の設定

㊷人口十万の都市の適正規模の設定

㊸人口十万の都市の適正規模の設定

㊹人口十万の都市の適正規模の設定

㊺人口十万の都市の適正規模の設定

㊻人口十万の都市の適正規模の設定

㊼人口十万の都市の適正規模の設定

㊽人口十万の都市の適正規模の設定

㊾人口十万の都市の適正規模の設定

㊿人口十万の都市の適正規模の設定

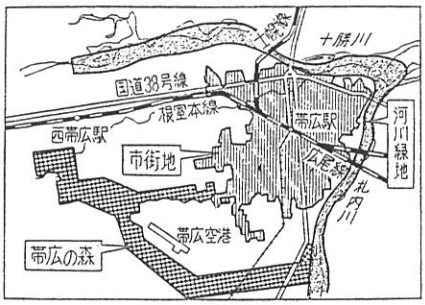
北海道新聞
昭和48年 9 月 4 日

帯広の森

—④—

自然守る〝防波堤〟

市街地の拡大に歯止め



北海道新聞
昭和48年 9 月 5 日

帯広の森

—⑤—

予算不足が悩み

緑の現状

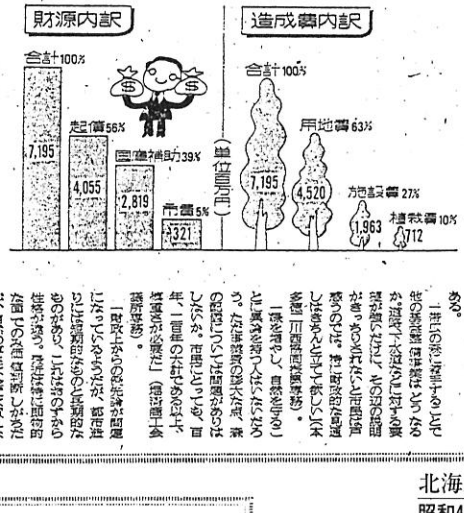
思うに任せぬ整備、管理

帯広の森 —⑦—

20年間で72億円

市民生活にシワ寄せも

財政論議

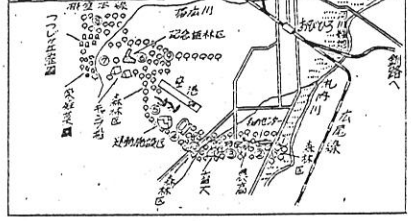


帯広の森 —⑥—

実施プラン

幅550メートル延長11キロ

十区に分け、それぞれに特色



北海道新聞
昭和48年9月6日

北海道新聞
昭和48年9月11日

帯広の森 —⑧—

市民の声

「市民の会」が応援

土地所有者の動きは複雑

市民サイドから応援を受けるという意識の高揚も発足、帯広の森をつくる市民の会結成大会

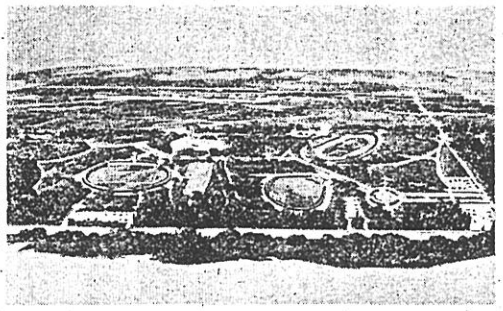
北海道新聞
昭和48年9月12日

北海道新聞
昭和48年9月13日

苫広の森

今後の問題点

管理に膨大な費用



「苫広の森」建物建設費用の総額予想図

どうする買収不能地区

北海道新聞
昭和49年3月12日

その功罪

落ちた偶像

<上>

施設造りに新風

背伸びし過ぎ借金残す

北海道新聞
昭和49年3月13日

落ちた偶像

<中>

19年間のよどみ

執行体制に不備

着想もこうじれば独走

厳しい野党の追及

議会の革新勢力をバックにつぼうの一大勢力を持つ市長でありながらその政策は、あまりにも無策だった。その原因は問題市長の人間性にあるのだが、より一層厳しい批判を浴びた。

義理と人情の人事

市政の最高責任者、長谷川市長の物騒な人事問題は、昨年一月、農山・市商政議員が市長に「人事問題」を質問したことに始まる。それが議会の議論の原因であることに間違いない。しかし、それは議会の責任でもあるのだ。

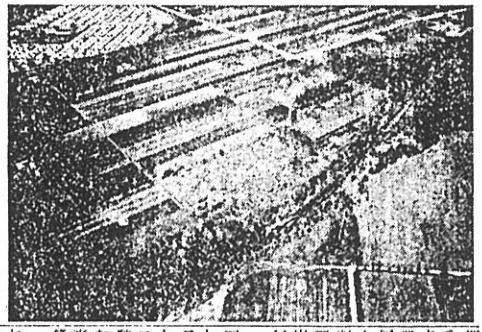
市長は「議会の人事問題」を理由に、「人事問題」を理由に、「人事問題」を理由に、「

〝帯広の森〟施設のデッサンを

来年からの造成に備え
コンサルタントに委嘱

十勝毎日新聞
昭和49年11月22日

帯広の森用地買収を進めている市は、明年からの造成に備えるとともに、なにを植えるか―施設はどこに配置するかのデッサンを進めるコンサルタントに委嘱する。どのような二十年―三十年後の帯広の森の景観完成プランが描かれるか注目される。



今年用地買収の帯広の森地域

札内川からつつじガ丘団地まで十二キロを副道百キロの都市遮断緑地でつなぐ全国的にもユニークな帯広の森は、田中市長の手で動植物園のメスを加えている。望湖西北部で完成。明年度はとはいえ、都市計画審議決定通り五年前後に補植したい考え。四十八年度の約十四・三ヘクタ帯広の森は、第二期帯広市総合計画にも実態予算はあげていなかった。中央官庁に根回し後、期で着手をが、ひょうたんかも、独走はなく、十二月上旬から同、緑化の時流に乗り、あれよあれよというまに国庫補助部化審議会」あるいは、市民組織の「帯広の森市民協議会」など図はあっても緑地、風土、地形、土質、水利、動植物の分布の基礎資料もなく、まして理想的な補植、造成基本設計は出来ていない。いわばドロ縄の

都市開発部は、このため三百万円で国が明治百年事業で造成した「昭和の森」や各地の森林スカイライン等設計、基礎調査したる森林専門家集団の長長開発コンサルタントに地質、地形、動・植物分布調査を依頼していたが、ヘリを飛ばしての航空写真の撮影など各種の近く調査を終える。

このため引き続き同部は三百七十万円で基礎調査資料をもとに、どのようになるかのように植え、さらに関連施設を配置する。最も都市遮断緑地として最適な帯広の森市民協議会」などの「帯広の森市民協議会」などの「帯広の森市民協議会」などの「

十勝毎日新聞
昭和50年6月2日

帯広の森力強く第一歩

白樺など五千本

植樹祭に千五百人参加

帯広二世紀への高らかなファンファーレ…。開拓前のうっそうとした原生林を再びこの大地に、と手がけられた市百年の大計「帯広の森」用地で一日、記念すべきクワおろしとも言える市民植樹祭が行われた。この日は同植樹祭実行委のメンバーをはじめ、市、市議会、各団体、一般市民など家族連れを含延べ千五百人が参加、一大市民事業の門出にふさわしい盛り上がりの中で五千本を越える幼木が植えられた。

関係者や来賓の手で行われた帯広の記念赤植樹＝一日午前

この日午前十時、植樹祭にあたり「こんにちは」とあいさつ。田本市長、てられた帯広の森造成地（空港東田市議会議長のあいさつ、祝辞町一〇線三八―四〇、約五ヘクタール）にはすでに五百人を超える市民が思い思いの装いで集結。塚本市助役の開催宣言に続いて林業已実行委員長が「緑豊かなマチづくりの中心となるこの事業をぜひとなったことに、心からお礼を申し上げたい」と感謝の辞を述べ、次の世代に引き継ぎ、用地提供者代表らがそのわ

この日午前十時、植樹祭にあたり「こんにちは」とあいさつ。田本市長、てられた帯広の森造成地（空港東田市議会議長のあいさつ、祝辞町一〇線三八―四〇、約五ヘクタール）にはすでに五百人を超える市民が思い思いの装いで集結。塚本市助役の開催宣言に続いて林業已実行委員長が「緑豊かなマチづくりの中心となるこの事業をぜひとなったことに、心からお礼を申し上げたい」と感謝の辞を述べ、次の世代に引き継ぎ、用地提供者代表らがそのわ

「メッセージを送っていた。植樹祭宣言は市子供会連絡会代表の佐藤明君（三）＝大空小六年＝が行った。

このあと林実行委員長、田本市長、市議、青年・婦人団体の代表らが空気の流れの中で植樹作業に入った。

カッコーの声も聞ける

○…植樹祭にあてられた造成地は昨年末で耕作されていた農地。濃い緑をたくわえた新地は防風林がまぶしく、南に快い潤

ら空気の流れの中で植樹作業に入った。

カッコーの声も聞ける

○…植樹祭にあてられた造成地は昨年末で耕作されていた農地。濃い緑をたくわえた新地は防風林がまぶしく、南に快い潤

きに、ハルニレ、シラカバを植え込み、記念植樹のセレモニーを終えた。

カッコーの声も聞ける

○…植樹祭にあてられた造成地は昨年末で耕作されていた農地。濃い緑をたくわえた新地は防風林がまぶしく、南に快い潤

ら空気の流れの中で植樹作業に入った。

カッコーの声も聞ける

○…植樹祭にあてられた造成地は昨年末で耕作されていた農地。濃い緑をたくわえた新地は防風林がまぶしく、南に快い潤

られた区画に「我々四半世紀後の殷賑者」と銘打ったメッセージ板を用意、ニレを中心に植樹に汗を流していた。国鉄ソロプチミスト帯広（殷賑代表）の会員ら三十人もサクラ、ブンゲンストーヒの二樹種を神人らしいていねいさで植え込み「五年後には立派なソロプチミストの卷に！」と張り切っていた。

○…心配された旺盛な飯盛は、森主幹の関係者らは「こりゃ」と頭を抱えていた。

○…帯広の森に期待を寄せた百村市長は、自分の好きなカシワの幼木を見てクワを持つ手に自然に力が入る。作業を終えて上々の出来。メガネの奥にキラリと光るものをえうかがえた。

○…団体参加、一般参加を合わせ、受け付けの事務局は大わらわ。五年間続ける参加カードが発行され好調だったが、用意したスコップ類がすぐに不足する盛況ぶり。市公園緑地課の職員

十勝毎日新聞
昭和51年5月17日

五分の会場いっぱいに繰り広げられた市民植樹祭

新婚さんも参加

市民植樹祭

帯広の森 七百人が一万本

帯広二世紀への緑の讃歌「第二回帯広の森市民植樹祭」が十六日午前十時から、南内南町南八線五三の造成畑内五ヘクタールを使って行われた。照っていても汗が吹き出すほどの陽気の中で、植樹開始当初ですでに参加者は七百人を超え「緑の森を後世に」と市民エネルギーが燃え上がった。

大空団地の北五百メートルに位置する植樹祭会場には、開始前から本降り。来賓による高さ三メートルのエゾヤマザクラの植樹式を皮切りと詰めかけ、開会式が始まった午前十時でおよそ七百人。三千五の団体・サークル、家族連れや新婚カップルなど個人が記念カードにスタンプを押し、苗木を次々に受け取った。

開会式では胡瀬善一実行委員長が開会の辞、田村市長と林克巳祭典委員長がともに「市民の手でこの森をつくり育てよう」とあいさつ。守口帯広営林局長、永沢十勝支庁長、柴田帯広市農業委員長、それに来賓者の百村前市長が立ってお祝いの言葉を述べた。最後に大望小六年の武田智博君（こが）「帯広の森づくりはぼくたちへの大きなプレゼント」と胸を張って植樹宣言をしセレモニーを終えた。

この日用意された苗木はトドマツ、アカエゾマツ、ニレ、ナナカマドなど落葉分を含め二万本。祭典を今後も息長く盛大に繰り広げたい」と期待をふくらませている。実行委事務局では「予定の午後二時まで、目標の延べ千人参加、一万本以上の植樹は十二分に達成できそう」と顔をほころばせていた。

会場は一面が以前の牧草畑。ところどころにツクシンボが顔を出し、ヒバリがさえずる好天のもとでチビッ子たちも大人に混じって大奮闘。町内会や学生団体、職場、若者グループなどが割り当てられた区画に記念の立て札を用意、指導を受けながら懸命の作業をくり広げた。記念の森区画では新婚カップルが手をとり合って、ほほえましい植樹ぶり。

同植樹祭は二年目を迎えて市民の間にすっかり定着、実行委のねらいである「素晴らしい緑の市民の森を後世に引き継ぐ」とする市民運動も深く浸透したよう。実行委と市は「全国モデルとなるすばらしいこの緑の

サンデーW 緑化清掃作戦

帯広市民総ぐるみ

願いこめ三万本

五千人参加 帯広の森で植樹祭

五千人が未来を託して植樹＝帯広の森の会場で

帯広市民の手で創造する緑の財産に、人生の歩みや喜びを残す「第三回帯広の森市民植樹祭」が、五月晴れの八日午前十時から帯広の森の造成地内の南町南八線を会場に行われた。サークル、団体をはじめ、一般市民など五千人が会場を埋め、思い思いに黙々と植樹。燃えたぎった帯広の森づくりの市民エネルギーは吹き抜ける強い風を八ネのけて高騰、暮くこの日だけで三万八千本の植樹を成し遂げ、参加者は"やった"の満足感に浸り切った。

横なぐりに吹きつける強い風（南部の植樹祭会場には、マイカは冷たいが、会場の帯広空港西一）を通ね、スコップを片手にした市民が続々詰めかけ、開会式（年改の赤木国雄さん（帯小五年）が始まった午前十時には約七千人が「十年後の帯広の森を楽しみに待っています」と植樹宣言し五千人。五十八団体・サークルでセレモニーを終えた。

仲間新婚のカップルや、家族連れが記念カードにスタンプを押し、苗木を次々に受け取った。

開会式では開会の辞、田中市長と林克巳祭典委員長が、ことしは帯広百年の森も、芽室町の六十ねを計画区域に入れ、帯広都市圏の広域植樹、そして、横では新婚のカップルが手を取り合い仲むつまじくとあいさつのあと守口帯広祭祭長、柴田帯広市祭委員長らが立って、お祝いの言葉を述べ、最後に森の少年、延べ参加者は五千人を超え

この日用意された苗木はトドマツ、アカエゾマツ、ナナカマド、サクラ、ニレ、ナラなど市民から新聞された分を含め約二万八千本。サークル、団体には六百坪から九百坪に区画された区域に入れ、一生懸命汗を流しながら植樹、そして、横では新婚のカップルが手を取り合い仲むつまじくくらっそうたる森に育てよう」と記念植樹。会場からは創造しつ思す喜びがあふれていた。

「予定の午後一時ごろまでに

十勝毎日新聞
昭和52年5月9日

三万本近い植樹ができそう」とった。

ことしは約十ねの用地を買収するほか、芽室町六十ねの計画決定手続きを行い、森の一角に帯大横の売買川からつつじが広公園まで延長約十一・にわたる三百三十四ねの広大な"帯市育てる苗ほもつくる―など、市遊歩緑地"帯広の森は、すでに民が子孫に残す偉大な緑の財産八億六千万円をかけ百ねの用地取得を終え、約十ねの植樹も行いる。つくりはすっかり軌道に乗って

帯広の森で植樹祭

1万本もの苗木

市民 3千人が参加

市民三千人が参加して行われた植樹祭＝帯広の森

帯広市民が自らの手で創造する緑の遺産"帯広の森"の第四回市民植樹祭が、つき抜ける十勝晴れに恵まれた十四日、帯広の森造成地内で行われた。ピクニックや行楽を兼ねたサークルや団体、それに一般市民など三千人が参加、五ねの広大な用地に約一万本の苗木が植樹された。

帯広の森市民植樹祭実行委員会（林克巳祭典長）が市民サイドで森の造成地内の植樹を実施してから今年で四年目。年々市民の関心も強まり、昨年まで十六ねの造成地内に約五万千本の苗木が植樹され、緑豊に緑のオアシスがはぐくまれている。

午前十時から開かれたオープニングのセレモニーでは、市民植樹祭実行委員長の朝潮晋一委員長、主催者の田中市長、林祭典委員長が「後世に緑の財産を」とアピール。参加者を代表して林克巳氏があいさつ、来賓の祝辞があって、さっそく植樹の開始。

区画ごとに職域や町内会、サークルに課取った団体と一般個にちなんでお母さんを囲んで親子、家族が広い造成地にこだまし、スコップで喜きをわすれ人は、スコップで喜きをわすれて次々に植樹。記念植樹のコーナーでは、この日の"母の日"の苗木を植える若いカップルなどが植樹。記念植樹のコーナーでは、この日の"母の日"の苗木を植える若いカップルなどが植樹。

しそうに植樹する家族づれ。また、赤ちゃんの誕生祝いに記念植樹。

この日、主催者が用意した苗木はトドマツ、シラカバなど一万一千四百本。参加者も昨年を大幅に上回る五十六団体、三千人でにぎわった。

十勝毎日新聞
昭和53年5月15日

国際色豊かに植樹祭

畜大留学生参加して
青空に九千本の苗木

帯広の森

帯広市民自らの手で創造する緑の遺産〝帯広の森〟の第五回市民植樹祭が、前日とは打って変わって初夏を思わせる暖くて汗ばむ十三日、帯広の森造成地内で行われた。ピクニックや行楽を兼ねたサークルや団体、家族連れなど三千人が参加、五ヘクタールの広大な用地に約九千本の苗木が植樹された。特に今年は、帯広畜産大学の留学生七人とその家族が参加、また会場で行われた「ティーチ・イン〝帯広の森〟」がNHKで放送されるなど国際色も豊かとなり市民の祭典に花を添えた。

帯畜大留学生も交じって一生懸命に植樹＝帯広の森

帯広の森市民植樹祭実行委員会（林克巳祭典長）は市民サイドで森の造成地内の植樹を始めてから今年で五年目。百年計画という遠大な構想だが、一年々市民の関心も高まり、昨年までに二十一ヘクタールの造成地内に約六万本が植樹され、着実に緑のオアシスがはぐくまれている。

午前十時からのセレモニーでは実行委員氏の棚橋普一委員長、主催者の田木市長、林祭典長が「後世に緑の遺産」をとアピール、来賓のあいさつ、森の少年隊の合唱と続き、早速植樹作業開始。

区画ごとに職場、町内会、サークルと師取り、スコップで汗だくの植樹。記念植樹のコーナーでは、この日「母の日」にちなんでお母さんを囲み楽しそうに植樹する家族づれ、赤ちゃんの誕生祝いに植樹する若いカップルなど歓声が広い造成地にこだましました。

また帯広畜産大学のスリランカ、韓国、フィリピンからの留学生七人とその家族が、ユネスコ協会の会員たちと五月例会を兼ねて植樹、ロムに「すばらしい」を連発。帯広の森も国際化の第一歩を踏み出した。

また十一時から森実行委員会が主催してシンポジウム「ティーチ・イン〝帯広の森〟」が提唱者に社教委員の山品昌弘、植田慈雨子、農学博士・牧野直幸の三氏を招いて行われ、帯広の森をどうつくるかに熱心な意見が出された。このもようは二十日午前十時にNHKで放映される。

十勝毎日新聞
昭和54年 5 月13日

はだ寒さを吹き飛ばして緑の植樹

緑の遺産九千本

帯広の森植樹祭

○…市民自らの手で創造する緑の遺産〝帯広の森〟の第六回市民植樹祭が十一日、帯広の森造成地内で行われた。この日は、南風りのはだ寒い天気だったが、ピクニックや行楽を兼ねたサークルや団体、家族連れなど二千五百人が参加、五ヘクタールの広大な用地にサクラ、シラカバなど九千本の苗木が植えられた。

帯広の森は道道八千代線の帯広空港近くから芽室町の一部を抜け、つつじが丘墓園までの十一キロを結ぶ五百メートルの森林や運動施設でつなぐ四百三十ヘクタールの広大な都市レクリエーションゾーンが区画ごとに職場、町内会、同期会、サークルなど思い思いのグッズを断緑地。市民サイルーブが区画ごとに師取り、ちょっぴり寒さにふるえながらこれまで二十六ヘクタールの造成地に約九万本が植樹され、緑のオアシスが、着実に育ちつつあるこの日、ピクニックや行楽を兼ねたサークルや団体、家族連れなど三千人が参加、五ヘクタールの広大な用地にサクラ、シラカバなど九千本の苗木が植樹された。特に今年は、帯広畜産大学の留学生七人とその家族が参加、また会場で行われた「ティーチ・イン〝帯広の森〟」がNHKで放送されるなど国際色も豊かとなり市民の祭典に花を添えた。

午前十時からのセレモニーでは、棚橋普一実行委員長、林祭典長、田本憲吾市長が「緑の遺産を後世に」とアピール、森の少年隊の合唱の後、早速植樹開始。

今年の植樹地は空港ターミナルから航空大学校帯広分校の間。区間を結ぶ五百メートルの森林や運動施設でつなぐ四百三十ヘクタールの広大な都市レクリエーションゾーンが区画ごとに職場、町内会、同期会、サークルなど思い思いのグッズを断緑地。市民サイルーブが区画ごとに師取り、ちょっぴり寒さにふるえながらこれまで二十六ヘクタールの造成地に約九万本が植樹され、緑のオアシスが、着実に育ちつつあるこの日、ピクニックや行楽を兼ねたサークルや団体、家族連れなど三千人が参加、五ヘクタールの広大な用地にサクラ、シラカバなど九千本の苗木が植樹された。特に今年は、帯広畜産大学の留学生七人とその家族が参加、また会場で行われた「ティーチ・イン〝帯広の森〟」がNHKで放送されるなど国際色も豊かとなり市民の祭典に花を添えた。

午前十時からのセレモニーでは、棚橋普一実行委員長、林祭典長、田本憲吾市長が「緑の遺産を後世に」とアピール、森の少年隊の合唱の後、早速植樹開始。

それでも「母の日」にちなんでお母さんを囲みながらの家族連れ、赤ちゃんの誕生祝いに植樹する若いカップルなどの歓声が広い造成地にこだましていた。

また、稲田小一年一組（高橋セツ子担任）の四十人の新入生たちも参加、お母さんやお父さんと一緒に「入学記念に」と六十本の苗木を植えた。「母子そろって帯広の街を育てていって欲しい」（高橋先生）と子供と苗木の成長競争を楽しみにしていた。この外、柏小一年一組、稲田小五年二組などを含め、七十一団体が参加した。

このあとステージでは、ケーキと新しい動物も相次いで仲間入りしており、見物客を楽しませていた。体重二百五十キロ、立ちあがると身長が二・五メートルもある雄ヒグマのオリの前には人だかりができ、シャンポおりにしばし見とれる人も。すっかり風格が出てきたシベリアトラもグマ、アライグマ、インドクジャクなど早食い、パン食い、赤白旗あげ競争などが行われ、飛び入り参加のチビっこたちでたにぎわい。自衛隊音楽隊吹奏楽演奏、お楽しみ抽選会と続き、園内は動物園まつりの最高潮に達した。

今シーズンは、コンドル、ヒ

また、ジャングルマウス、フラワーカップ、ゴーカートなどの遊具も、乗る順番を待つ客の列ができ、引っ張りだこのモテぶり。このほか、園内では、チャボ、コチャボなど愛がん鳥を集めた展示会も開かれ人目を引いていた。

十勝毎日新聞
昭和55年 5 月11日

五月晴れ さわやかな汗

帯広の森で市民植樹祭

市民ぐるみで帯広のマチを"緑のベルト"でつつもうーと、「第七回帯広の森市民植樹祭」が二十四日午前十時から市内南町南六線五十四で、約三千人が参加して行われた。今回は、帯広市の空港姉妹都市、大分市から来帯した観光親善訪問団（団長・佐藤益美大分市長、七十人）も特別に会場を訪れ、帯広市民とともに植樹に汗を流した。この日は朝から晴れ上がり、気温も上昇して植樹には絶好のコンディション。町内会、同年会など団体ごとに参加した人たちは、シラカバ、ナナカマドなど合わせて一万本の苗木を午後一時ごろまでに植えた。

青空の下、植樹方法の説明を聞いてさあスタート

大分観光団も参加

三千人、願い込めて一万本

同植樹祭は、帯広の森市民植樹祭実行委員会（柳瀬善一委員長）と帯広市の共催で五十年から実施している。第七回目の今年は、七ヶ所の面積にシラカバ、ナナカマド、チョウセンゴヨウを一万本植樹することにし、主催者側では市民の参加を呼び掛けていたが、青年会議所、老人クラブ連合会、国際ソロプチミスト、帯広ミニロータリークラブ、公衆町内会、森の少年隊、ジェット婦人の会など六十一団体からの申し込みがあった。

この日は、昨日の悪天候とはうってかわって青空が加をのぞかせ、気温も上昇し、空模様を心配していた主催者側ではひと安心。午前十時から植樹祭式典が行われ、柳瀬実行委員長が開会のことばを述べたあと、田本憲吾帯広市長と林宮己市民植樹祭実行委員会祭典長が主催者側あいさつ、引き続き、木ノ内国明帯広市議会議長、能勢誠夫帯広営林支局長、濱江彰十勝支庁長、それに佐藤益美大分市長が祝辞を述べた。

次いで参加者を代表して藤井茂子ジェット婦人の会会長があいさつ。このあと、大分市のミスみどり三人（高橋功美子、諸崎美佐子、伊達和美さん）から大分県の木で天分市の花でもある夏後梅の苗木が帯広側に、田本市長、木ノ内議長、林祭典長から帯広市の木のシラカバの苗木が大分側にそれぞれ受け渡された。

杉山雅樹帯広営林支局造林課長が植樹方法を説明したあと、森の少年隊が「森の少年隊のうた」を合唱、同隊の石田吾郎さん（啓西小学校五年）が植樹宣言を行い、同十時四十分、植樹が開始された。

約三千人の市民が各団体ごとに六百平方メートの区画に分かれていを埋めて植樹。「大分市も"みどりの"を大切にしているが、帯広市の雄大な帯広の森プランは今後も息長く、市民植樹を続けていくことにしている。

十勝毎日新聞
昭和56年5月24日

空港姉妹都市、大分市から佐藤市長（中）も参加して記念の植樹

十勝鉄道跡地を寄付

十勝鉄道、帯広市に

4億8千百万円相当 面積の六四%を

"とそっぽ"の愛称で広く市民に親しまれた十勝鉄道（帯広市山ぼその終点を帯広市内の旧国鉄帯広駅まで延長約一・二キロ）が廃止されて間もなくで廃線をすすめているが、十勝鉄道株式会社（坂野吉成社長）は、本社・東京）は十勝鉄道跡地全線（帯広の六四%にあたる延長約一・二キロ、二万一千七百八十五・五四平方メートル）を帯広市に寄付を申し出た。このため、上京中の田本市長が東京都中央区京橋の十勝鉄道本社におもむいて感謝状を贈る。

十勝鉄道は大正九年、北海道鉄道が帯広駅を開業したのち、十勝鉄道株式会社が発足し、四年後の昭和三年に帯広駅まで延長約一・二キロ、現在までに十勝鉄道全線延長約二万一千七百八十五・五四平方メートル、四億八千百万円相当をこのほど帯広市に寄付を申し出た。このため、上京中の田本市長が東京都中央区京橋の十勝鉄道本社におもむいて感謝状を贈る。

今回、十勝鉄道が寄付をしたのは、二千九百六十九平方メートル、四・とそっぽ通（仮称）として全区間二千八百九十三メートルを整備する。五十七年度実施設計にかかる。

将来は公園大通＝とそっぽ通＝として四億八千百万円相当になって

帯広市は「公園として利用する」（藤井信孝・都市建設部事業課長）ということで、「とそっぽ通」（仮称）と名付けて全区間二千八百九十三メートルを整備する。五十七年度実施設計にかかる。

今回、十勝鉄道が寄付をしたのは、二千九百六十九平方メートル、四・とそっぽ通（仮称）として全区間二千八百九十三メートルを整備する。五十七年度実施設計にかかる。

畳のすけみつ

「家＝十勝大橋（十勝川仙鶴）に至る総延長五千八メートル）につなげるサイクリングロードが完成する。

十勝鉄道が寄付した十勝鉄道跡地

東北海道新聞
昭和56年12月24日

さわやかな汗 6,000人

手に手にスコップ

帯広の森植樹祭 空も祝福、五月晴れ

十六日の日曜日、十勝地方は朝から青空が広がり、気温も上昇して、屋外レジャーには絶好のコンディション。帯広の森市民植樹祭、音更さくらまつり、本別山菜つつじ祭り、新得神社山桜まつり、南水公園桜まつりなどの催しや、各種スポーツ大会があちこちで行われ、大勢の人でにぎわった。ゴールデンウイーク期間中はあいにくの悪天候続きだったが、ここに来て"春らんまん"といったところ。桜も満開とあって、飲めや歌えや、のグループもあちこちで見られ、住民は春のサンディーを満喫していた。

好天に恵まれにぎわう市民植樹祭。次々と苗木が植えられた＝16日午前10時50分

十勝毎日新聞
昭和57年5月16日

○…市民自らの手で森をつくろう―と、第八回帯広の森市民植樹祭が十六日午前十時から、市内南町南八線五十一、五十二の帯広の森造成地内で行われた。この日は朝からカラリと晴れ上がり、風もほとんどなく絶好の"植樹日和"。開基百年記念ということもあり、昨年を大きく上回る約六千人の市民が会場を埋め、ツツジ、エゾヤマザクラ、シラカバ、ナナカマドなどの苗木約一万二千本を植えた。

同植樹祭は、帯広の森市民植樹実行委員会（棚瀬善一委員長）と帯広市の共催で五十年から実施している。開基百年記念の今年は六・七㌶に一万二千六百本を植樹することにし、市民に参加を呼び掛けていたが、百団体、三千人（昨年六十四団体、二千人）の申し込みがあった。

参加団体は、広陽小六年四組（六十人）、稲田小二年一組（七十人）、あおい幼稚園（五十人）、帯広北ロータリークラブ（六十人）、十勝親子会（十人）、愛灯学園（二十三人）、社会党帯広支部（二十人）、東十和町内会（五十人）、空港姉妹都市の大分市（年）が植樹宣言をして一斉に植樹を開始した。参加者は持参したスコップで土を掘り、いたわるような手つきで苗木を植え、気温もどんどん上がって、汗はだくだくの陽気。約三十分ほどで、植樹を終えたが、参加者のどの顔も満足感にあふれていた。

このあと会場では、「十勝の春をうたおう市民コンサート」「フォークダンスフェスティバル」も行われ、弁当を広げる家族連れも見られるなど、さながら"ピクニック"といった光景。大分から訪れた人も「大分でも"ぜひ"来年にしているが、ここは楽ですばらしい風景ですね」と、感心していた。

昨年まで、帯広の森では三十六㌶に六万七千二百八十三本が植樹されており、今回を含めると四十二・七㌶、七万八千八百八十三本になる。しかし、全体植樹計画に比べると、まだ一割ちょっとに過ぎず、主催者側では今後も息長く市民植樹を続けていく考えだ。

●創業三十年、長き信頼
電話(0155)22-1181(代表)
坂口商事

五月晴れ、帯広の森に〝快汗〟

スコップ手に六千人

大分親善訪問団も参加

「市民の手で森を作り、帯広を緑豊かなマチにしよう」と、第九回帯広の森市民植樹祭が十五日午前十時から、同市西二十三条南五丁目二十五番地の帯広の森造成地内で、団体三千人、個人三千人合わせて六千人の市民が参加して開かれた。この日は朝からカラリとした青空が広がり、参加した市民や姉妹都市・大分市の代表団はスコップ片手にとう伝説を流しながら合計一万二千二百本の苗木を植樹した。

雄大な自然をバックに植樹する広陽小の児童と父兄

帯広の森は、帯広西側から芽室町の一部を含め、つつじが丘墓地にまたがる総面積四百二・二ヘクタールの広大な郊外遊歩緑地帯。

同植樹祭は帯広の森市民植樹祭実行委員会（柳瀬善一会長）と市の共催で五十年から毎年開かれている。これまでに約六万本の樹木が四十三ヘクタールに植樹されている。今年は西・六ヘクタールにグロ－カトーヒ、ブンゲンストーヒ、ロッキー山脈五葉松、チョウセン五葉松などの常緑針葉樹を主体とした十三種類の樹木を植えた。

同祭実行委員会は市民の参加を呼び掛けていたが、今回六十九団体三千九百七十七人の申し込みがあった。豊西小の六年生（二百八十人）、自衛高校（二百一十四人）、帯広老人クラブ連合会（百人）阿部珠算塾（六十八人）、帯広十人会（十人）、帯広少年婦人会（十五人）、丑年四会（三十人）、大分市緑の親善訪問団（七十三人）など参加者は市民の各層に広がり、盛り上がった。

第9回 市民植樹祭

大分市のミスみどりに囲まれて記念植樹する田本市長と大分の代表団

午前八時三十分の受け付け開始前から参加者は続々と会場を訪れ、午前十時、植樹祭式典が柳瀬実行委員長の開会のことばで始まり、田本憲吾帯広市長、林克己市民植樹祭実行委員会祭典長があいさつ、引き続き石井収帯広開発建設部長、藤本和司帯広営林支局長、大分市長代理の松本賢員同市教育長が祝辞を述べた。

次いで大分市の松本団長、仲道一市議会議長、ミスみどりらが、田本市長、林祭典長、すずちゃ隠し、豊後（ぶんご）梅の苗木八十本を贈った。植樹指導、森の少年隊のうたの後、同少年隊の米澤増英さん（帯広小五年）が植樹宣言、参加者は広い会場に一斉植樹を開始。スコップで穴を掘り、それぞれの苗木を手付きで植えた。三十分ほどで植樹は終わったが、参加者の顔からはそう快な汗が流れ落ちていた。

この後、会場では帯広の森プラネタリウムでルークラスコンサートも行われ、バンジョー、ギター、マンドリンなどの楽器が奏でる陽気なタイプに合わせてフォークダンスフェスティバルが開催された。また、コンサートの合間にはミス・メークイン（五月の女王）コンテスト、六拍りコンテスト、植木市などの多彩な催しが繰り広げられ、参加した市民は思いに青空の下で楽しんでいた。

帯広、大分の友情深め合う

訪問団歓迎レセプション

十五日の帯広の森市民植樹祭に参加するため十四日午後、空路来帯した大分市緑の親善訪問団（松本賢員同団長）の歓迎レセプションが、同日午後六時から、帯広グランドホテルで開かれた。

一行は松本同市教育長、仲道一市議会議長、ミスみどり、民間のツアーら七十五人、十四日午前、大分市を出発した。二行は、羽田空港を経由して同日午後一時四十五分、帯広空港に到着、市役所を訪れ田本市長を表敬訪問した後、歓迎レセプションに臨んだ＝写真。

レセプションで田本市長が「今後とも両市が固い絆で結ばれるよう祈っています」とあいさつ。松本団長が「市民植樹祭の成功を願っています」と歓迎にこたえた。続いて仲道大分市議会議長、林克己帯広の森市民植樹推進委員会長があいさつ。長野厚大分合同新聞事務の音頭で乾杯した後、歓談に入り両市の友好を深め合った。

十勝毎日新聞
昭和58年5月15日

若木よ大きく育て

植樹に汗を流す市民

帯広の森

十勝毎日新聞
昭和59年5月13日

10回目の市民植樹祭

肌寒さの中6千人参加

植樹10万本超す

「市民自らの手で森を造り、帯広を緑豊かなマチにしよう」と、第十回帯広の森市民植樹祭（帯広市、帯広の森市民植樹祭実行委員会共催）が十三日午前十時から帯広の森運動施設区内で開かれた。今年の参加者は団体三千人、個人三千人の約六千人。あいにく、この日はとりとめない肌寒い天候だったが、市民や空港姉妹都市の大分親善団の代表らはスコップ片手に約八千七百本を植樹、さわやかな植樹で軽い汗をかいた。

植樹祭は五十年六月一日に第一回目が開かれ以来、毎年開かれており、今年で十回目。これまでに針葉樹を中心に九万八千本の樹木が四十七・三ヘクタールに植樹されている。参加者は十年前の第一回目は百人だったのが年々増え、今や市民の年中行事として定着している。今年は四・四ヘクタールにアンデンストーヒ、エンジュ、アカエゾマツ、ニオイヒバなど十一樹種八千七百本の樹木を植えた。

ミスみどりに囲まれて植樹する
東団長と田本市長

十年目の節目を迎えた植樹祭には約六千人が参加した。主な参加団体は帯広ボーイスカウト（三百三十人）、白樺高校三年生（三百五十人）、豊成小六年（百七十人）、帯広、北、西ロータリークラブ（三百人）など。さらに明治乳業、十勝バスなどの民間企業、官公庁など市民各層に広がりを見せた。

受付けは午前九時半。参加者は続々と会場に集まり午前十時、柳瀬善一実行委員会長のあいさつで植樹祭式典が始まった。田本憲吉帯広市長、林芯己市民植樹祭実行委員会会長らによる主催者あいさつに引き続き、泰和夫大分市助役が祝辞を述べた。

次いで植樹祭十周年を記念して、植樹祭功労者の表彰が行われ、故・吉村博前帯広市長ら四個人、四団体に田本市長から表彰状が授与された。

このあと、大分市の親善団長、仲道幸一市議会議長、吉原吉美大分合同新聞社総務局次長、ミスみどりらが田本市長、林芯己市民植樹祭実行委員会会長、林芯己帯広市長、すずらん姫に扮装（ふんそう）した市民植樹祭実行委員会会長の柳瀬善一氏、森の少年隊のメンバーの後、同少年隊の大沢泰和さん（豊成小五年）が植樹宣言。参加者はそれぞれの苗木をスコップで掘った穴に一本一本植えた。この日は肌寒い天気だったが、初参加の中川昭一、鈴木宗男両代議士ら参加者はそう快な汗を流し、植樹を楽しんだ。

また、植樹後は帯広の森プルークラスコンサートが行われ、フォークダンス、六掛けコンテスト、植木市など多彩な催しが植樹祭を盛りあげた。

今年も大分から訪問団

盛大にレセプション

帯広の森市民植樹祭に参加するため十二日午後、空路帯広入りした大分市親善の親善訪問団（団長・泰和夫同市助役）の歓迎レセプションが同日午後六時から帯広グランドホテルで開かれた。

田本市長と握手する東団長

訪問団が植樹祭に参加するのは五十六年から今回が四回目。二日は東助役と団長に仲道幸一市議会議長、ミスみどり、民間のツアーら計三十九人。十二日午前、大分市を出発し羽田空港を経由、同日午後一時十分に帯広空港到着。市内見物、市役所訪問の後、歓迎レセプションとなった。

まず、田本市長が「今晩はゆっくり帯広を満喫して下さい」とあいさつ。東団長が「帯広の市民植樹祭は夢とロマンに満ちている。今後のマチづくりに参考となることを大変、引き続き前川博帯広市議会議長、仲道幸一大分市議会議長、林芯己帯広の森市民植樹推進委員会会長らがあいさつ。木下甚帯広物産協会会長の音頭で乾杯したあと、和やかに談笑、最後に吉原吉美大分合同新聞社総務局次長の万歳三唱で散会した。

十勝毎日新聞
昭和59年5月13日

4個人、4団体を表彰

故・吉村博氏

林　克己氏

柳瀬善一氏

松井　栄氏

今年で十年の節目を迎えた市民植樹祭を記念し、帯広市は十三日、植樹祭に功があった四個人、四団体を表彰した。表彰されたのは故・吉村博前帯広市長、柳瀬善一帯広の森市民植樹祭実行委員長、林芯己同祭実行委員長、松井栄同実行委員、帯広を愛と花で美しくする運動実行委員会（柳瀬善一会長）、森の少年隊（前込宗郎指導委員長）、国際ソロプチミスト帯広（森山愛子会長）。

帯広青年会議所（笹井裕三理事長）。四個人、四団体とも第一回市民植樹祭以来、緑化推進に深い関心を示し、苗木の育成や市民PRに努めてきたのが認められた。特に故・吉村前市長は全国一の都市しゃ断緑地帯広の森構想の立案、実行者として市民植樹祭を推進したのが高く評価された。

全国の導火線に

林芯己市民植樹祭実行委員会祭典委員長は「十年前の第一回目の参加者はわずか五百人だった。それが今年は六千人にも増え、年中行事として市民に定着してきたことは大変喜ばしいとともに、植樹本数は今年で十万本の大台に乗るだろう。帯広の植樹祭が今後とも全国的な植樹ブームの導火線となることを期待したい。

参加増に期待

柳瀬善一帯広の森市民植樹祭実行委員長の話＝緑は人生に希望を与える色。緑が多いマチは活気も育ってくる。発展していくというイメージがある。樹木を見ていると手がすがすがしい気持ちになるのは人間の本来の感情だと思う。私はその気持ちを素直に行動に移してきたつもりだ。これからも参加者が増えていくことを期待したい。

五月晴れの下、家族そろって苗木を植える市民たち

十勝毎日新聞
昭和60年5月12日

過去最高 七千人が参加

第11回市民植樹祭 五月晴れの下、いい汗

第十一回帯広の森市民植樹祭（帯広市、帯広の森市民植樹祭実行委員会共催）は十二日午前十時から、帯広の森運動施設区内で開かれた。今年の参加者は百六団体、個人を含めると七千人と過去最高を記録した。この日は朝からカラリとした五月晴れ。集まった市民は空港姉妹都市・大分の一行と一緒にさわやかな汗を流しながら植樹、森の生長に夢を託しながらジンギスカンやコンサートで楽しい一日を過ごした。

第一回の市民植樹祭は、五十年六月一日。その時は市民約五百人が参加、約八・七㌶の面積にシラカバ、トドマツ、ハルニレなど四百三十四本を植樹した。以来、樹木の生長とともに参加者、植樹本数は年々増え続け、昨年までに五十一・七㌶に約九万九千本の苗木を植樹、延べ参加人数も三万二千七百七十六人に達している。

昨年五月に帯広の森は整理大臣賞を受賞、九月には中曽根康弘首相が帯広の森を視察「この森は二十一世紀に向けての最大のプレゼント」と絶賛している。

この日午前九時半、受け付け開始と同時に作業着、ジャージー姿の市民が続々と会場に詰めかけた。同十時、棚瀬善一市民植樹祭実行委員長の開会の言葉で式典が始まった。主催者を代表して田本憲吾帯広市長、林克己実行委員会祭典長があいさつ、続いて来賓の佐藤益美大分市長らが祝辞を述べた。

このあと、佐藤大分市長、平智大分市議会副議長、増里俊策大分合同新聞社取締役主幹が苗木を植え、ミスみどり三人から田本市長、林祭典長、すずらん娘四人に寿俊（ぶんご）梅の苗木百本が贈られた。同時に、昨年六月、市民植樹祭実行委員会が第二回朝日森林文化賞優秀賞で受けた副賞百万円が棚瀬会長から田本市長に手渡された。

植樹指導、森の少年隊の歌のあと、森の少年隊隊員の岡部健太郎君＝東小五年＝が元気に植樹宣言、参加者はそれぞれの区画に分散、一斉に植樹を開始。四・四㌶にブンゲ、ナナカマドなど十一種類、合計八千五百五十本を植えながらさわやかな汗を流した。

佐藤益美大分市長（中央）らと苗木を植える田本市長

新村源雄、鈴木宗男、中川昭一代議士らも市民に交じって植樹を楽しんでいた。

植樹後、ブルーグラスコンサート、フォークダンスフェスティバルなど企画も盛りだくさん。あちこちにジンギスカンなべを囲む風景がみられ、午後三時ごろまで、森の中には歓声がこだましていた。

盛大に歓迎レセプション

○…大分市様の親善訪問団（団長・佐藤益美大分市長）の歓迎レセプションは十一日午後六時から、帯広市西二南三の帯広グランドホテルで開かれた。

同訪問団は五十六年以来、毎年、市民植樹祭に参加、今回は佐藤大分市長も三年ぶりに団長として来帯した。

会場では植樹祭関係者、すずらん娘ら約五十人が出迎え、はじめに田本市長が「皆さんの森帯は市民もみから育んでいます。豊後梅を『植らし』育てることができなかったことをおわびし、今後も友好が続くようお願いします」と歓迎のあいさつ。

佐藤大分市長が「南の九州と、北の北海道がしっかり手を結び、今後もお付き合いを願いたい」とおれの意義を述べた。

初体験、メークイン植え付け

○…大分市様の親善訪問団一行は、帯広空港での歓迎式の後、午後一時過ぎから、帯広市が今年初めて開いた空港緩衝緑地帯内の観光農園「メークイン」の植え付けを行い、十勝の農作業の気分を味わった。

同農園は、帯広市が同空港利用の各種親善訪問団、視察団にメークインを植えてもらい秋の収穫期に記念として送り届ける。広さ約一㌶の畑。指導を受け、早速用意した約四十㌔のジャガイモを、植え付けたが「初めての作業」に思い出になりました」と喜んでいた。

ドングリ見事に育つ

○…「自分たちで拾い集めたドングリを後輩たちが立派に育ててくれました」と感激しているのは、森の少年隊副隊長の井神千尋さん（○○）。

井神さんたち森の少年隊一期生は九年前、鈴蘭公園などで拾い集めたドングリから後輩たちがカシワの苗木に育てて、この日千五百本を植樹した。当時小学五年生だった井神さんも今では社会人。一・二㍍あまりに育った苗木に「九年前のことが思い出されますと快い汗を流していた。

釣具 きた釣具店
西8南13 ☎8854

十勝毎日新聞
昭和61年5月11日

緑の森に夢をはせ

緑の森づくりに快汗！。第十二回帯広の森市民植樹祭（同祭実行委員会、帯広市共催）が十一日午前十時から、帯広の森運動施設区内を会場に開かれた。十二回を重ねて、市民行事、として定着しつつある同祭に今年は、団体が百八団体六千人、個人千人の約七千人が参加。あいにく、この日はどんよりした曇り空で風も強く、肌寒い天候だったが、グループや家族連れで集まった市民は、姉妹締結二十周年を迎えた空港姉妹都市・大分市の緑の親善訪問団一行と一緒に約八千本を植樹、森の生長に夢を託してさわやかな汗を流していた。

森の生長に夢を託して快い汗を流す市民

第12回帯広の森市民植樹祭

7千人が汗流す

「市民自らの手で森を造り、帯広を緑豊かなマチにしよう」というのが市民植樹祭の目的。今年は四万にカシワ（二千本）、ブンゲンストーヒ（千本）、朝鮮五葉松（千本）など十一種、八千本を植樹、市民の手でつくられた森は六十ヘクタール、十一万五千本で、延べ参加人員は四万七千人にのぼっている。

当日は午前九時半の受け付け開始と同時にジャージー、作業着姿の市民が続々と会場へ。午前十時、棚瀬善一実行委員長が「百年後の市民のために帯広の森を立派に育てましょう」と開会のことばを述べ、田本市長、来賓の長谷目原太大分市助役があいさつした。

続いて大分市の長谷目助役、ミス・みどりから田本市長、すずらん娘に贈呈（ぶんご）梅の苗木が手渡され、お返しに帯広市からシラカバの苗木が贈られた。植樹指導、森の少年隊のうたの後、同少年隊の森谷尚美さん（同西小五年）が植樹宣言。参加者は広い会場に一斉に植樹を開始、強風にも負けずに一本一本に植えていった。新村源雄、中川昭一、鈴木宗男三代議士、佐々木行雄、小野寺勇同議員も市民に交じって植樹を楽しんでいた。

植樹後、ブルーグラスコンサート、フォークダンスフェスティバルなど企画も盛りだくさん。あちこちでジンギスカン鍋（なべ）を囲む風景が見られ、参加者は夜二時ごろまで緑の中で楽しい一日を過ごした。

毎年欠かさず参加

○…「木のように、強い風にも耐えて成長する子供に育って欲しいと参加しています」と子供たちの植樹に目を細めるのは市内稲田町で森林業を開いている阿部かよさん。五十年の第一回以来、一度も欠かさず、子供たちに呼びかけて植樹祭に参加している。今年も父母を含めて五十八人で参加、植樹のあとはジンギスカンを囲んで楽しいひと時。

「植樹をするようになってから、何市にも積極的に取り組む子供になってきますね」と同阿部さん。子供に交じってスコップを動かし、快い汗を流していた。

味処 吉男一 西一条通10 ☎23-6332

ミスみどりらに囲まれて植樹する田本市長（左端）、長谷目大分市助役（左から3人目）、棚瀬同議会議長（右から2人目）

大分市との友好深め合う レセプション

○…大分市緑の親善訪問団（団長・長谷目駅大助役）の歓迎レセプションが十日午後六時から帯広市内のグランドホテルで開かれ、空港姉妹都市締結二十周年を祝い合い、両市の友好を深め合った。

一行は長谷目助役、桑苗男同市議会議長、ミス・みどりと民間ツアーら四十二人。五十六年以来毎年、市民植樹祭に参加している。

レセプションでは植樹祭関係者、すずらん娘ら約五十人と一緒に帯広市アドニス少年少女合唱団の歌声が一行を歓迎。田本市長の代理として小野寺助役が歓迎のあいさつ。長谷目大分市助役がこれにこたえて「共に、緑豊かなまちづくりを目指し歩しよう」とおれの意気を述べ、祝宴に移った。田本市長も遅れて会場に姿を見せ、初任半のすずらん娘らとともに友好の輪を広げていた。

友好を深めた大分歓迎レセプション

十勝毎日新聞
昭和62年5月17日

スコップ手に7千人

第13回 帯広の森市民植樹祭

大いなる緑の遺産を自分たちの手で！。第十三回帯広の森市民植樹祭（同祭実行委員会、帯広市主催、林克己祭典長、棚瀬善一実行委員長）が十七日午前十時から帯広市西二十三南五、帯広の森区内四万坪の敷地を会場に開催された。時折、晴れ間の見えるまずまずの日和に恵まれたこの日の植樹祭には史上最高の百十九団体と個人の約七千人が参加。スコップをかついで訪れたチビっ子からお年寄りまでのグループ、家族連れなどが、それぞれの思いを込めて大地に新しい息吹を吹き込んだ。また、これに合わせて来帯した大分市緑の親善訪問団も植樹に協力。帯広市民とともにさわやかな汗を流した。この日の植樹で市民植樹実績は六十四万、総本数十二万三千本となった。

緑の森に思いを込めて植樹に汗を流す市民らー大空小六年生グループ

新たな緑の生命に夢託す

回を重ねること十三回、市民行事としてすっかり定着した植樹祭に、今年も大勢の市民が集まった。午前九時半の受け付け開始と同時にジャージー姿でスコップを担いだ恒例の〝植樹祭スタイル〟の市民が続々と会場に。市民自らの手で森を造り、帯広を緑豊かなマチにしよう」という同祭の趣旨に賛同した人たちで四万の会場は埋めつくされた。

午前十時、棚瀬善一委員長が「未来の帯広市民にマチを贈むグリーンベルトを贈るため、皆で協力し合いましょう」と開会の音を述べ植樹祭がスタート。田本市長の主催者あいさつに続き、佐藤益美大分市長が来賓の音を述べた。

このあと、恒例の帯広市と大分市の苗木交換が行われ、ミスみどりらが贈呈（ぶんご）梅の苗木を田本市長に、すずらん娘らがエゾヤマザクラの苗木を大分市長に贈った。植樹指導、森の少年隊のうたに続き、同少年隊の田静純子さん（大空小五年）が植樹宣言。それぞれ持ち場に分かれ、早速植樹を行った。

この日、市民が植えたのは、チョウセンゴヨウマツ（八百五十本）、ハンノキ（千本）、ノニレ（同）など計八千本。参加者らはスコップで穴を開け、苗木を慎重に植め込むと、土をかぶせて、丁寧に地ならし。植えたばかりのちっぽけな苗木を見つめ、未来の森に思いをはせていた。

植樹後はブルーグラスコンサート、フォークダンスフェスティバルなどイベントも多彩に繰り広げられた。シンギスカン鍋（なべ）を囲んで談笑する光景もあちこちで。参加者らは緑の空気を吸い込みながら、自然の中での一日を存分に楽しんでいた。

大空小、6年生全員と父母が参加

○…チビっ子からお年寄りまでの緑の祭典、今年の市民植樹祭には小、中学校の学級単位での参加も多かったが、ひと際目立ったのが六年生全員が参加した大空小学校（太田道次校長）。父母、教師あわせて三百十六人が会場に詰めかけた。

太田校長によると「楽しい街づくりを通しての協調心の育成プラス卒業の記念に」というのが参加の目的。なかには森の少年隊のメンバーもいるが、「ほとんどが植樹の経験は初めて。割り当てられた二平方メートルほどのスペースにチョウセンゴヨウマツ、ヒダカゴヨウマツなどの苗木を植えながら「こんな苗木があんなに大きくなるのかなあ」と不思議そうに遠くの木々を見やっていた。

ミスみどりらに囲まれエゾヤマザクラの植樹を行う田本市長（中央左）と佐藤大分市長（同右）

大分市との友好一層深まる 歓迎レセプション

○…大分市緑の親善訪問団（団長・佐藤益美大分市長）の歓迎レセプションが十日夜、帯広市内のグランドホテルで開かれ、空港姉妹都市締結二十周年を祝い合い、両市の友好を深め合った。

一行は佐藤市長のほか菊谷保作大分市議会議長、ミス・みどりの三人と江藤義英大分合同新聞社東京支社長、民間ツアー客ら六十三人。帯広市からは田本市長をはじめ、すずらん娘や関係者ら七十人が臨んだ。

五十六年以来毎年の来帯があって、すっかり和気あいあいの打ち解けた雰囲気のなかで、レセプションは進められた。最初に、田本市長の歓迎の音を受けた佐藤市長が「心温かく迎えて頂き有り難い限り」とおれの意気、プレゼント交換や帯広カムイトウボポ保存会（市川正治郎会長）によるアイヌ民謡の披露なども行われ、訪問団の一行はずすらん娘と記念撮影をするなど帯広での一夜を楽しんでいた。

和気あいあい行われた歓迎レセプション

十勝毎日新聞
昭和63年4月24日

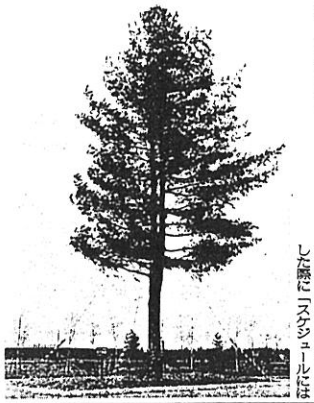
33年に皇太子殿下が植樹

「お手植えの松」由来記した石碑を

「開拓の名誉のしるし」

当時の芽室町長 大村さんが帯広市に要請

【芽室】三十三年、皇太子殿下が来勝した際に植樹した記念樹「お手植えの松」は現在も帯広の森で生長を続けているが、「この松の由来などを記した石碑のようなものを建てて欲しい」とこのほど、当時の芽室町長、大村建三氏(七七)=同町東二丁五=が田本憲吾帯広市長に要請した。担当の同市公園緑地課では市内の他部局と連絡をとりながら検討を始めている。



この松は、皇太子殿下が当時の同町拓北地区を「開拓モデル地区」として訪問、視察した際に「スケジュールにはなかったが、たっての願いでこの木の由来が分かるようにして欲しかった」と語る。また、「来年開かれる国体には皇室関係者が来勝するし、今年はお手植えからちょうど三十年目、時期も適当だ」としている。

芽室町では「帯広市所有の土地なので、市の意向次第。何らかの協力要請があれば検討したい」(河合信一助役)とし、当の帯広市は現在、検討に取りかかったばかりで「具体的な結論はまだ先。芽室町とも連絡調整しながら建立するかどうかを決めたい」(公園緑地課)としている。

立派に生長している「お手植えの松」

十勝毎日新聞
昭和63年5月8日

14回目を迎えた市民植樹祭

日曜インタビュー

帯広の森市民植樹祭実行委員会事務局次長
山田英和さん(41)

森作りは文化行為

心と体の喜びぜひ体験を

今年も来年の帯広に市民の手で緑の遺産を残す「第十四回帯広の森市民植樹祭」(棚瀬善一実行委員長)が十五日の日曜日、市内西二十四丁目六で盛大に開催される。七千人が参加して四万に八千本の木々を植える。今でこそ大勢が参加するにぎやかな一大イベントだが、一回目の時の参加者はわずか三百人。スタートからここまで祭りを築き上げてきた山田さんに植樹祭と緑のまちづくりの意義を尋ねた。

百年たって初めて評価

―そもそも植樹祭スタート時の理念は何だったのですか。

吉村前市長時代の田園都市構想を受け継いだ形なんですがね、根底には地域百年の歴史の中で我々の文化に対する思いれは欠けているのではという考えがあるんです。

帯広もどんどん発展してきて、これまでの文化・文明はフロー(流れ)の連続だった。それをストック(蓄積)に切り換えていく時期ではないか と。緑をいとおしむ気持ちは文化そのものですよね。そして「緑のため」の森造りはまさに文化行為だと思う。生産のための国有林とは全く意味が違う。生産、流通、消費、廃棄、再生産、といっしょに土を掘り起こしていく。これは忘れない思い出になるし、地域への愛着も深まり地域を見つめるよい機会になる。しかしイベントとしての盛り上がりとは別に先ほど述べた緑文化への市民の貢献という点ではまだ今一歩だなという感じです。日常的な緑作りに直接結びついていないのが寂寞。しかし特にこの二、三年、花壇コンクールや市の桜並木造成、森の少年隊活動など徐々に芽が育ちつつある。大きな進歩はないながらも少しずつの前進。これがいいのかもしれませんね。

木があれば心がなごむ

―今年のテーマは「心緑の喜び・体緑の歓び」とか。どういう意味でしょうか。また、市民に呼び掛けがあれば最後に一言。

木があれば心がなごむ―これが植樹の原点ですからね。その意義を感じ取れるも含めてこれが「心緑」の喜びなわけです。そして植樹祭はそれを体感できるチャンス。目で楽しみ空気を味わい、体を動かして緑の素晴らしさを満喫する―これが「体緑」の喜びです。帯広市民も三世代目、四世代目になって、自分のマチを考える時代、行動に移す時代になってきた。生活の機能性と緑の大切さを見極める時代になってきている。

取材を終えて

市民植樹祭には二つの大きな側面があると思う。ひとつには七千人規模にまで発展した盛大な市民のお祭りであり、もうひとつには緑の財産を肌で感じ、その意義にじっくり目を向ける絶好の機会という点。だれもが口々に「緑は大事」と叫ぶけれど、なぜ大事なのか必要なのかを山田さんほどきっちりと考えている人はそうはいない。木は黙っていても“緑”緑”と考えているわけじゃないよ」と笑っていたが、緑を思えば文化に行きつく―そんな思いがした。(渡辺 隆人)

5月のお菓子
花見だんご
六花亭

帯広の森に未来の遺産を

十勝毎日新聞
昭和63年5月15日

盛大に市民植樹祭

スコップ手に7千人

土まみれになり汗流す

帯広の未来に緑の遺産を残す「第十四回帯広の森市民植樹祭」（同祭実行委員会、帯広市主催、林克己祭典長、棚瀬善一実行委員長）が十五日、帯広市西二十四南六の帯広の森で盛大に開催された。前日までの冷風もやみ、曇り空ながらも穏やかな一日を緑の中で過ごそうと七千人の市民が集結。スコップを手に土まみれになりながら大地に八千本の新しい樹木の息吹を吹きこんだ。また、今年も大分から緑の訪問団が参加し植樹に協力した。この日の植樹で市民植樹祭実績は六十八万、十三万一千本となった。

日程しもかい来見える晴れ渡る絶好の植樹日和。日差しもかい来見える晴れ渡る絶好の植樹日和。

日差しもかい来見える晴れ渡る絶好の植樹日和。

日差しもかい来見える晴れ渡る絶好の植樹日和。

植樹交流活発な
帯広市―大分市

姉妹都市の名称見直し論浮上

「空港」→「緑」に

帯広市の空港姉妹・大分市の一行が十三日来帯、帯広市民と交流を深めているが、懇会の内部などでは「空港姉妹都市でなく、緑の姉妹都市にしてはどうか」との意見がくすぶっている。確かに昭和五十六年以降は植樹を通して交流が深まっており、名称の見直し論が浮上になりそうだ。

帯広市と九州・大分市は昭和四十一年十月に空港姉妹都市の締結をした。東京を起点にほぼ等距離にあり、同じYS―11型機を利用していたという再見だった。

しかし、四十六年に大分新空港は市内から国東半島・今津湾に移転、ダブルトラッキング（二社相互乗り入れ）が実現している。

この移転を機に翌四十七年大分市側が空港姉妹解消の申し入れを帯広に対して行って

洋装のナルセ
帯広市西2・南11 ☎74353

共同植樹を行う田本市長、秦団長（右から2番目）ら

十勝毎日新聞
平成元年5月14日

緑の森に思いを込めて植樹する市民

第15回帯広の森市民植樹祭

森の生命

7千人汗流す

すずらん娘に囲まれて植樹を行う田本市長（中央）、棚瀬委員長（右）、林祭典長（左）

緑あふれるマチづくりを市民の手で！。第十五回帯広の森市民植樹祭（同祭実行委員会、帯広市主催、林芳己祭典長、棚瀬善一実行委員長）が、二十一日午前十一時から市内西二十四南五の四ヘクタの祭典会場で盛大に催された。十四日の季節はずれの"雪"で、始まって以来の延期となり、盛り上がりの面で心配されたが、フタを開けると七千人が参加。植樹の始まるころには太陽も顔を見せ、チビっ子からお年寄りまでのグループ、家族連れがスコップ片手に、緑の苗木八千本を次々と植え込み、それぞれの思いを森の生長に託した。

この日は朝早くから大勢の市民が集合。ヤチダモ、ヤマザクラ、ハルニレなど十三種類、八千本の苗木を植樹、この日で市民植樹の実績は七十二ヘクタ、十三万九千本になった。

オープニングセレモニーでは、棚瀬実行委員長が「市民一人ひとりの努力で、帯広を緑豊かなマチにしましょう」と開会の祝辞。この後田本憲吾帯広市長、林芳己祭典長のあいさつ、植樹指導、森の少年隊の感謝、同少年隊の木本剛志くん（栄小五年）が「緑あふれるマチを完成させよう」と植樹宣言を行い、植樹祭の幕が開いた。

"帯連"の光り園と愛灯学園

○…今年も、緑の一大イベントには数多くの団体が参加。中には毎年参加している"帯連"だ。

仲良く隣り合わせの敷地に、同園（約四十人）がスコップ持参で集まり、ツツジ、チョウセンゴヨウマツなどを手際よく次々と植樹。生き生きとした表情で、緑の森づくりを楽しんでいた。

石の敷き詰め作業

○…今年から帯広の森園路造成が開始。植樹祭に先立ち午前十時から帯広の森調整池の周辺で石の敷き詰め作業などが行われた。

これは植栽だけでなく、公園造成にも市民の力を結集させようとするもの。この日造成したのは、陸上競技場の園路北端から南六線までの約三百メートル、幅四メートル、小分けして敷き詰めるのが主な作業。百五十人が参加した。

この試み、会場整備がさることかれはじめた同植樹祭の新イベントとしても期待が高い。一時間ほどで出来上がった園路を眺めては「思ったよりも

十勝毎日新聞
平成元年5月21日

百年記念館で植樹

大分市緑の親善訪問団一行

緑を通して友好の輪を―十三日帯広入りした大分市緑の親善訪問団（団長・秦和夫助役）の一行が、十四日午前十時から帯広百年記念館の庭で記念植樹を行い同市の親善交流を深めた。

一行は秦助役をはじめ、日名子方（ひなこ・よろず）大分市議会副議長、ミスみどりや一般市民ら四十六人。例年

同訪問団は、帯広の森市民植樹祭に参加し式典に彩を添えて来た。しかし、今年はあいにくの悪天候で植樹祭は延期、急きょ百年記念館での親善植樹会がセッティングされた。

この日は、一行と同じく十三日に来帯した「日中経済知識交流会」中国側出席者の一行十六人も参加。はじめに田本憲吾帯広市長が「大分市、中国との友好の輪が、今日の植樹でさらに広がることを願っています」とあいさつ。この後、早速、植樹に移った。

植え込まれたのは、オンコの苗木六本。各訪問団の代表は、スコップを手に仲良く苗木の根元を土埋めし、気持ちよい汗を流した。雨で水をきされた形の記念植樹だったが、同市の友好の絆（きずな）は一層強まった。

なお大分市からプンゴウメ十四本、逆に帯広市からはオンコ五十本が交流の"証（あかし）"として贈られた。

また、遠路はるばる来帯した一行を温かく迎える歓迎レセプションが、十三日夕帯広グランドホテルで開かれた。

はじめに、田本市長、秦団長が「これからも緑を通した交流を深めよう」とあいさつを交わし、早速開宴。十勝の特産物を使用した料理を囲み、会場は終始和やかな雰囲気。すずらん娘、ミスみどりと記念撮影をする光景が会場のあちこちで見られ、出席者は楽しいひと時を過ごした。

十勝毎日新聞
平成元年5月14日

また協賛イベントとして、ブルーグラスコンサート、フォークダンスフェスティバルなど楽しい催しも目白押し。植樹の後の腹ごしらえにと、ジンギスカンに舌鼓を打ちながら、参加者たちは楽しい一日を過ごしていた。

この日は青空が広がり、正午の気温は一九・六度と上昇。日曜日としては七日以来の好天になり、それぞれの持ち場に分かれた市民は、仲間、家族同士で苗木を一本一本大切に植樹していた。

えい込み作業がスタートした。

きれいに出来ました」と、参加者は一様に高揚した様子だった。

十勝毎日新聞
平成元年11月10日

帯広の難題

'89 マチづくり検証

＝4＝

悲劇的なミスマッチ

歴史的時空考え戦略を

地域デザイン欠如

「ミスマッチもここまで来ると悲劇的。センス以前の問題だね。」

武道館など並び立つ外観の体育館、アイスアリーナ、バイピングレンク、そして研修センターと帯広市自慢の施設が立ち並ぶ「帯広の森運動施設区」。今年九月、札幌近郊の建築学生数人がここを見学に訪れたが、その"デザイン評"は厳しいものばかりだった。同行した地元関係者の一人は「せっかくの壮大な街づくりなのに、その出現が（施設づくりで）全く考慮されていないとの批判だった。こんな建物を帯広市民はよく許したね」と、まで言われましたよ」とその時を振り返る。

形、哲学バラバラ

マチの文化度は、建築デザインに、より顕著に表れると言われる。公共施設はとりわけ身近なバロメーターとなるが、「は的充足」では胸を張る帯広のマチも、この点の詳細はすこぶる低い。

コミセン、学校建築、福祉センターしかり。「やり手」に挙がった帯広の森施設に至っては、地元からさえ「百年がかりで進める街づくりに（デザイン的に）耐え得る建物はひとつもない。形もバラバラ、哲学もバラバラ。恥ずかしいが今さら壊せないのだから、いっそ周囲に高木を植え、人目に触れないよう隠してしまった方が帯広のため」との声が聞こえて来る。

「アイデンティティー（シティーシンボル）『景観バランス』専門家からみた帯広の公共施設の大半は、そのどれもが欠如した「ただ建てただけの固体」にすぎないのだという。

こうしたデザイン面での不毛ぶりは行政全般に言えることだが、最近は「行政の文化」を旗印に各自治体で努力が始まっている。帯広市についてもそれは認めるが、しかし「都市経済力・全道一」（今年一月、時事通信社調べ＝札幌市を除く）の"驕慢"には到底釣り合わない取り組みの遅れを否定は出来ない。

広がる釧路との差

この点で、最近よく比較対象に挙げられるのが釧路市だ。地元出身でポストモダン派を代表する建築家、毛綱毅曠氏（東京在住）に設計を依頼、市立郷土博物館、釧路湿原展望台、市立東中学校、フイッシャーマンズ・ワーフとマチのイメージづくりを積極果敢に進める釧路の"戦略"は、マチづくりにかかわる帯広の若手グループの間ではよく話題に上る。

「帯広でも過去、空港ターミナルビル（設計・黒川紀章氏）のような動きがあったが、それきりで後に続くものがない。『流れ』がすべてとは思わないが、そこを攻めるわけでなく、市民に議論を下ろすでもなしで全くの中途半端。実体になる前のプロセスなしで、いい地域デザインなど生まれるはずがない」行政としてどんなマチづくりを目指しているのか、帯広の施設からは全く見えてこない。帯広がいくら道東の拠点と驕いでも、このままでは釧路に離される一方だ。

好素材生かせず

「デザインとは形ではなく感じるもの。大平原、青空、農村、そして日高山脈と多くの素材を持ちながら、それをテーマとして生かしきれない公共施設の現状に、若手建築士らはイラ立ちを隠さない。

経済界の一人は「デザイン不足も、結局は『土建屋的体質』のツケ。ハードオンリーの市の姿勢に、文化的センスを求める方が無理」と冷たく言い放った。

それにしても、こうした状況では帯広市の"発展戦略"の向たるかさえ問われかねない。地域開発にも精通した地元のある関係者は「マチづくりはデザインそのもの。真者のため、目先の市民のためでなく、もっと歴史的なタイムスパンの中でコンセプトをとらえ、それを少しずつでも"形"にしていく努力と苦悩が必要だ。他には絶対マネの出来ないこの状況と道士を力ッチリ押さえ込んでいけば、おのずから地域戦略は見えてくる」と提言している。

（つづく）

「景観無視」との批判が集まる帯広の森運動施設

十勝毎日新聞
平成2年5月13日

市民、植樹に快い汗

帯広の森植樹祭

大分親善訪問団も

家族ぐるみで植樹にさわやかな汗

市民の手で帯広の未来に緑樹し、コンサートやジンギスカンで春の祭りを楽しんでいた。

十六回を重ねる同祭だが、帯広市共催）が十三日午前十時から、帯広の森（帯広市西二十一南五）を会場に開かれた。薄曇りながら時折、晴れ間ものぞく好天の下、市民の恒例行事としてすっかり定着した同祭に、今年も約七千人が参加。集まった市民は空港姉妹都市・大分市の親善訪問団一行とともに約八千本を植樹。この日は午前八時半の受け付け開始と同時に参加者が続々と詰めかけ、同十時に柳瀬善一市民植樹祭実行委員長の開会の言葉で式典が始まった。高橋幹夫帯広市長が主催者あいさつ、続いて安東裕大分市教育長が祝辞を述べ、田本慶吾前帯広市長が植樹祭功労者として感謝状を受けた。

このあと森の少年隊のうた、同隊の代表の江原比呂美さん（広陽小五年）が「一本の役割と保護の大切さを認識し二十一世紀には緑の森が完成すること を願います」と植樹宣言。植樹が一斉にスタートした。参加者は未来の森づくりにさわやかな汗を流した。

植樹後はブルーグラスコンサート、フォークダンスフェスティバル、ゲーム大会など多彩な催しと、野外で囲むジンギスカンに参加者は二時すぎまで思う存分祭りを楽しんでいた。

カラーリーブリント1時間仕上
エースフォート
帯広西店●☎0155-24-5151

十勝毎日新聞
平成２年５月14日

人形劇で交通安全学ぶ

市内の五保育所 園児が記念植樹も

帯広市児童家庭課では十四日、五月の児童福祉月間の関連行事として市内ひばり保育所とあやめ保育所の二カ所で交通安全教室を、同じく市内の青葉、豊成、南の三保育所の園児による記念植樹を行った。

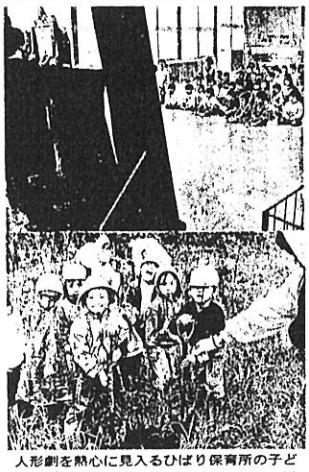
交通安全教室は、午前九時半からひばり保育所で始まり、七人の婦人交通指導員が人形劇などで飛び出し注意と信号機の見方を重点的に教えた。

子供たちも森の動物が出てくる楽しい人形劇に熱心に見入っており、交通安全を考える気持ちが芽生えたようだった。

記念植樹はあいにく雨にたられたが、三保育所から約八十人の園児が十三日帯広の森市民植樹祭が行われた隣の、市内南商高校剣道の会場に集まり、エゾヤマザクラやシラカバ、カシワなど五十本を植えゆんだ。

雨の中だったが、集まった子供たちは元気いっぱい「大きくなーれ」の願いを込めて一生懸命スコップと格闘していた。

美よし鮨
帯広市西2条南2 ☎22400



人形劇を熱心に見入るひばり保育所の子どたち（上）と雨の中元気いっぱいの記念植樹

北海道新聞
平成２年６月13日

緑 まち 未来

夢の大計 植え始めて15年

検証 帯広の森 ◎1◎

都市を森で包もうという壮大でロマンあふれる構想のもとに帯広の森造成が始まったのは昭和五十年の春。大勢の市民が集う植樹祭も十六回を重ね、十五万本近くの苗木が植えられた。森には近代的なスポーツ施設も次々と整備されてきた。だが、多大な投資と市民の情熱とは裏腹に、森のあちこちには問題が必要な密植林や成長をやめた無残な枯れ木の姿も多い。百年の大計を成功させるため、今やるべきことは何か。造成開始から十五年を機会に、森を原点から検証してみる。

原点

理想の20万都市

ウィーンの森が手本

昭和四十年、当時の吉村博市長（故人）はオーストリアの首都ウィーンを訪れ、町を包むうっそうとした森を見た。

「これだ」

帯広の森の発想の原点はここにあるという。

市街地を緑のベルトですっぽり囲もう。澄みきった青空、きれいな水、豊かな緑に太陽が輝く理想の二十万人都市をつくろう。吉村市長が描いた当初の構想はこんな感じあふれる町づくりだった。

「おれたちが死んでも、帯広という町は永遠に残る。百年、二百年かけて、子や孫に誇るべき郷土をつくりたいんだ」と吉村市長はよく言っていました。（木島子雄彦・元助役）

この構想はさっそく市長の構想として発表され、市第二期総合計画（四十二年～五十五年）の中で姿を現す。

当初市が考えていた森の規模は聞く人を驚かせた。市街地を緑取って、十勝川から札内川まで続く緑のベルトは、幅およそ五百五十m、長さ約十一㎞、総面積七百ha。当時としては国内に例のない大規模なものだった。

「街を長けると森があるる。どの道を行ってもその前に十勝特有の大樹林が大きくわれわれを迎え入れる。森の中には、花壇、噴水場、運動場に記念樹林、果樹園、彫刻の森などがほどよく配置され、そこには北方動物が放し飼いとなり、市民は家族そろって一日を楽しく過ごすことができる。…（吉村・元市長『風雪有情』から）

当時吉村市長は「人口二十万人定数論」を唱えていた。公害の防止やきめ細かい行政を目指すなら、一都市の人口は二十万人程度が適当という考えで、市街地が むやみに広がるのを防ぐ「帯広の森」はこの理論にもぴったり。ロマンチストの吉村市長は、遠い森の未来ほほえんでいたろう。

ところで、「森」の発想はそもそも吉村市長個人の ものではないらしい。当時計画に携わったという一人は「吉村・元市長は『冗談からこんな話が出た。

「四十五年四月に市に公園緑地課が初めて発生して、何か新しいことをやろうと燃えていた。あ る時仲間と、昔あったという「そうした自然林をゼロから再現できないかと話し合ってね。市街化区域と調整区域の間に切った木を百年かけて復活させようというのだ。

ちょうど高度経済成長がもたらした公害が各地で問題になり、環境保全が叫ばれ始めた時期で、「国も支援に大乗り気だった」と当時の関係者は得意げに口をそろえる。

構想が具体化した四十七年、市都市計画委員会に提案されると、今度は市民から反対意見が続出した。

「川西地区との間に壁を作っていいのか、優良な農地をつぶすとは何事だ、道路や下水道整備の方が先だとずいぶん反対され、もうたいへんでした」（推進派で、同委の委員長だった田本豊治・前市長）

四十八年度から二年間、総事業費七十二億円という壮大な事業。市民に戸惑いがあったのも当然かもしれない。四十八年三月議会に提出した予算は満場一致で可決されて、特別委で可否を決めるという事態になった。吉村市長は緑の大切さを主張し続けた。「森は決して使いなくなるものではない。今、手をつけなければ、あとで必ず後悔する」。

同年十一月、面積縮小、事業費削減という条件つきで事業は採択され、気の長い旅が始まることになった。

十勝の開拓は晩成社の依田勉三が入植した明治十五年（一八八二年）、木を切ることから始まった。百年かけて復活させようというのだ。

この企画は杉本和弘、増田聖子両記者が担当します。

森づくりの後継者、田本・前市長とともに記念植樹する故吉村市長（左）
＝昭和50年６月、第１回市民植樹祭

土曜いんたびゅー

北海道新聞
平成２年８月４日

森の感動多くの人に

愛情持って　秋の育樹祭に期待

意外から帯広の森を見守る
“生みの親”
牧野　道幸さん（７０）

――久しぶりに見る帯広の森はどうですか？

造成が始まったのは確か昭和五十年でしたよね。それから七、八年くらいは心配で、名古屋から年に一回は見に来ていたんです。なかなかじっくりと森を歩き回る機会はなかったんですが、今回のデザインワークショップのおかげで、丹念に見て回ることができました。正直言ってがっかりしました。やっぱりやっぱりなんだ、と思ったね。管理が全然されていない。何のために造成されたのかにはがっかりしました。

――そもそも牧野さんが、帯広の森を手がけることになったきっかけは何だったんですか。

帯広営林支局に勤めていたことから、ちょくちょく勉強会の講師なんかをやっていたんです。当時私が主宰していた立地研究所は、全国でも珍しい地質開発コンサルタントの草分け。帯広の森には計画の段階から参加するようになった。森の植樹祭なんかに住ぜるんだ」とつきぬけられたほどです。

――当初計画に比べる市民の理解がどこまで進んでいるかは疑問。「帯広の森」は、スポーツ施設地区としての方が有名だし、植樹祭にしても、何の木か知らないで植えている人が多い。帯広は樹種の差が大きく、自然条件が厳しい。他にある森林公園は既に森の木を使っているが、帯広の森は畑を森林にする大事業だけに、かじを取る人たちがよっぽど熱を入れて取り組まないと。

――森に足を運ぶ市民は確かに少ないですね。

侵入禁止のさくがあるのは残念。捨てる人がいるなんて信じられないですね。行政もどんどん組織を縮小するなど取り組みが足りない。森を知る、知らないは別にして、一回でも多く足を運んでほしい。森と、木と仲良くなれば、自分なりのモノサシで何かがしたくなるはずです。その点で秋に予定しているという育樹祭は期待をかけてます。

文学好きなものですから、いつか「十勝の森」をテーマに小説を書きたいと思ってるんです。本州の湿っぽい土地で育ったものですから、帯広は外国のよう。冬の凍寒時などは苦業にできない感動を覚えます。すばらしい森を素材にした大作にしたいのですが―。

（聞き手・杉本　和弘記者）

大正十三年（一九二四年）福岡県吉富町に生まれる。ソウル大農学部の前身の京城帝国農林学校を卒業、満州鉄道の造林試験課に就職、兵役の後営林局入り。九州、大阪、名古屋と回り、帯広には昭和二十八年から十年間勤めた。前橋の六日市営林署長を最後に退職し、四十三年、当時ではまだ珍しい土木関係コンサルタント会社を設立。帯広の森には計画当初から中心的に参加。芳子夫人とともに文学が大好き。「山や森をテーマにした小説を書く」のが当面の目標だ。自宅は名古屋市緑区鳴海町。

緑まちまち未来

北海道新聞
平成２年６月14日

帯広の森

◎２◎

植樹祭

市民が支え定着　外部からも高い評価

帯広の森の市民植樹祭が始まったのは昭和五十年。今年は約七十人が参加しました。第一回の参加者は二百五十人足らずで、にぎわいとはほど遠いものだった。

「一回目の時、僕は一人で百二十本植えた。この十本は家内の分、こっちの十本は孫の分って、自分で理屈をつけてね。あんなに植樹が疲れるとは思わなかったよ」。一回目から同祭実行委の委員長を務める朝瀬芳一さん（７０）は、まちづくりを真剣に考える一部の市民有志が支えてきた。当初、緑面積七百ヘクタールという規模を想定していた森の計画も、議会や一部地権者の反対に遭い、昭和四十九年二月の都市計画決定時にはほぼ半減した。さらに三月には構想を打ち出した吉村市長が退陣し、夢の大計は勢いを失っていた。そこで、計画を支えようといくつかの市民グループが活動を開始し、七月には「帯広の森市民協議会」が発足した。

市の財政は苦しく、用地買収で手いっぱいの状態。なんとか植樹は市民参加でという思いがあり、同協議会が実行委となってそれにこたえることになる。

「森づくりはまちづくりの原点」という思いは設立初の時から変わらない。市民意識を盛り上げようと、森の協議会で模擬議会を開いてみたり、五回目の植樹祭では「ディーチェイン帯広の森」という催しを開いて、森づくりへの市民の意見を出し合ったりした。そのうち、予想以上にどんどん参加者が増えた。これ・けの人がまちづくりに参加するなんて、意義あることだと思う」（同実行委の山田英和事務局次長）

帯広市は帯広営林署などから寄贈された苗木を集め、手探りで始まった植樹祭。きちんとした年次計画もない出発だった。

その後、市が整備した苗圃（なえば）で、五十二年に誕生した緑化ボランティア「森の少年隊」が拾ってきたドングリを育てるという、森の再生産もかしずつ始まっている。イベント部門が充実し、「楽しめる植樹祭」となり、市民の間に定着しているのも大きな特徴だ。

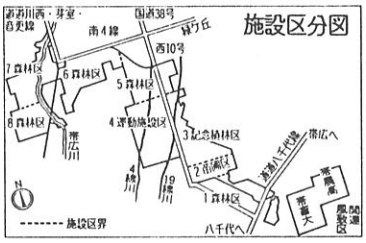
市民の情熱が結集したこの活動が評価され、市は五十九年に緑化推進運動功労者内閣総理大臣賞を受賞した。

現在の市の造成計画によると、造成計画面積は四百二十五ヘクタール。森の八〇％を森林区、二〇％を施設区とし、全体を八ブロックに分けて、整備・四％はふるさとの森、第一（二十五・一％）は苗木を育てる苗圃、第三（五十七・七％）は記念の森、第四（八十・三％）はスポーツの森、第五（四十二％）は創造の森、第六（六十九・六％）はレクリエーションの森、第七（五十八％）はふるさとの森、第八（四十三・四％）は果樹林。

それぞれのテーマに沿って、緑化技術センター（苗圃）、野外音楽センター（レクリエーションの森）などの施設が造られる予定だが、現時点で整備が進んでいるのは運動施設が中心だ。関係開発が決まった五十八年ごろから、スピードスケート場、アイスアリーナと、急速に新施設が建てられ、おかげで「帯広の森」の名が全国的に知られることになった。

「内閣総理大臣賞」をもらった時、中曽根さんが来て、一緒に森で植樹をした。森ところがまだ林にもなっていないころで、ちょっと冷やかされたけどね。こういう森づくりは珍しいから全国的に注目されて、あちこちで講演を頼まれた（田本前市長）。

毎年七千人近くが参加するまで成長した市民植樹祭。今年五月十三日



帯広市の森市民植樹祭　植栽実績

回	年月日	面積	木数	備考
1	昭50.6.1	8.7㌶	3,000本	参加団体に植樹地を貸付
2	51.5.16	3.4	11,297	〃
3	52.5.8	4.6	19,010	
4	53.5.14	5.0	8,645	
5	54.5.13	4.3	8,041	植樹ピッチ設定（2m×3m幅）
6	55.5.11	5.0	8,050	
7	56.5.24	5.0	9,240	
8	57.5.16	6.7	12,000	
9	58.5.15	4.6	11,000	
10	59.5.13	4.4	8,700	（開基100年記念）
11	60.5.12	4.4	8,550	
12	61.5.11	4.0	7,920	
13	62.5.17	4.0	8,000	
14	63.5.15	4.0	8,000	
15	平1.5.14	4.0	8,000	
16	2.5.13	4.0	8,000	
	計	75.8	147,453	

検証・帯広の森

(3)

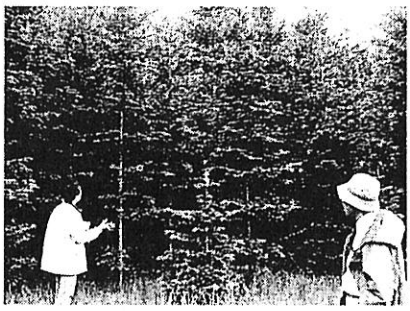
北海道新聞
平成2年6月15日

管理

今こそ手入れを
間伐巡り市民が対立

一九八六年五月十一日、釧路や知床など道東各地で自然保護運動に携わる市民運動家らが帯広で交流会を持った。その前日に行った「帯広の森巡検」は参加者の関心を集め、多くの問題が提起された。

「植えれば良い、ではなく育て方を考え方をも良くなっていない。早グループ分けした夜が「植え方の指導に」と焦りを隠さない。



山根裕さんは「四年たった今、森の状態はちっとびしゃりと」「樹種はいうちに手を入れるべき」と焦りを隠さない。

公園を十四、五人でカバーしているに過ぎず、手が回りきらないのが実情だ。

当初の構想は管理・運営を団体か公社で行う予定だった。今年二月、造成十六年目にしてやっと

間伐が必要なトドマツ林一枝と枝とがぶつかり合い、元気がない植樹間隔が二m、ほぼ密植状態だった五十一、五十二年区のシラカバやトドマツ林。陽光は中に届かず木も弱々しく細い。市民団体などから間伐の要望が出始めている。

市へは連の要望も殺到した。「思い切ってせっかく植えた木を切るとは何ごとか」と。生産を目的にした経済林や公園緑地課は「植樹後四年間は業者に委託して下草刈りを行っている」と説明するが、市内の全

当時の提言が今こそ必要なのだ、と。

「森構想と市民植樹祭を単純らしい、粘り強い取り組みが必要だ」。（交流会の記録から）

十勝環境問題研究会員

十六回の市民植樹祭を経て、植えられた木は十四万七千四百五十三本。植栽面積は七十五・八ha。広大な植林区全体を管理するには、専任一署ほどの体制が必要と指摘する学者もいる。

と第三セクター「帯広緑化振興公社」が設立された。定款には「市内の緑化の推進」の項がかろうじてあるものの、当面の最大目標は無農薬ゴルフ場の建設だ。

「生活の中に緑の思想を浸透させるのがまず第一だった。その点で七千人もの市民が参加するようになった植樹祭はイベントとしては大成功だと思う。しかし、回を追うごとに当初の原点・理想の影が薄くなっていったことも事実だ」（第一回植樹祭から実行委に加わり、現在事務局長を務める山田哲・山田林業社長）

牧草が生い茂る種林地の一角一植えた苗は立ち枯れ、記念の標柱だけがむなしく立つ

美林でなく、目指すのはうっそうとした自然林。ある程度自然にゆだねる、任せるべきだ」という意見が幅を利かせるようになる。

しかし、そうなろうか。

「帯広の森を天然林のように、なんと言う人がいますが、全く無責任な話です。人の手で一斉に植えた木が天然林になるには百年単位のサイクルが必要。枯れるに任せるだけ苗を植え続けるのは膨大な無駄だし、仮にそうしてできたとしてもジャングルのような森では人は集えない」（真鍋庭園・真鍋智紀社長）

市民参加の手法を探ることは、森をより市民に近づける点で成功したものの、植林事業の中で必要不可欠な間伐・選伐を「やりにくくする」という皮肉な結果を招いたようだ。

「一番最初の基本計画作りに参加した時、十五・二十年後ほどの間伐を考えていました。市街地と農地の間に造成するのですからひとりが木々のオーナーではなく、市民全体で森づくりをしていく」とい木で工芸品を作って売りとげを造成費に充てたり、森の中にログハウスを建てるとか、象徴的な意味で、自ら副産物で育つ森、を志向したんです」（十五年前の基本計画策定に携った帯広大・近堂祐弘教授）

「創立〇〇周年」「〇〇運動記念」「結婚〇〇周年」。一本一本が手塩にかけて育てられる。人生とともに育つ記念樹があってもいいなあ。ただ気をつけなければならないのは市民一人

北海道新聞
平成2年6月16日

検証・帯広の森

(4)

経費

投資既に120億円
買収予定、残り3割も

百年の大計といわれる帯広の森事業。「森」の用地買収と併せ、市内での緑化も迫られる。帯広市の用地は、耐えられるのだろうか。

計画当初の構想では、用地買収は事業開始から十五年から二十年で終了する予定だった。ところが現在までに買収を終えた面積は約一百五十ha。買収予定の三百四十八・九haのうち六七・七%に過ぎない。西帯広地区の急激な宅地化に伴い、地価も買収を始めた時期に比べ最大で二十倍に高騰している。残りの土地を現時点ですべて買い上げるには七、八十億円が必要になる。

「農業をしている地主が出るとこのほか起債なども含め吉村元市長は、「森」造成の年間の買収額のペースを三億六千万円とした。市の一般会計が百億円そこそこの時である。ところが事業

権者には年寄りも多い。十五年前に都市計画決定しているので私権も制限され、売却を機に離農を決意し後継者を育てていない人もおり、早く買ってほしい、かといって、一年間の公園緑地予算の大半を帯広の森の用地買収だけに使えないこと。もかかるし」（帯広市の森地権者協議会・佐々木茂雄会長）

公園用地の買収には国から経費の約三分の一補助が出る。ただ、一年次々と整備した。

一方で、帯広の森が市内の緑化を進める上で大きな足かせになっている。

平成元年末での公園計画は帯広の森、緑ケ丘公園、児童公園などを含め

二年目にバトンを渡した田本前市長は、「市民負担があまりに大きい過ぎる」とペースを二億二千万円に縮小した。

田本前市長が推し進めたのは、小・中学校の改築、各地区ごとのコミュニティーセンターの建設、市道の特殊舗装など。また「森」の中では、五十五年から国などの各種補助事業を使って陸上競技場、スピードスケートリンク、体育館、アイスアリーナ、野球場などを

もっと市民に利用されるものにしないと」（計画の見直しを主張する水野正光市議）

都市の緑の目安である緑被率は昭和四十九年、都市計画区域内が九・五二%。それが十年後の五十九年には一〇・九〇%に増えた。しかし市街化区域では逆に七・八四%から七・七五%に減っている。

駅高架化と周辺整備事業

駅高架化と周辺整備事業は帯広の森、緑ケ丘公園、児童公園などを含め

ぎ込んだ費用は、用地買収四十四億円、前ほやスポーツ施設整備の公共事業には補助金をからめて七十六億円、市民植樹祭に六千八百万円。既に百二十億円以上もの巨費にのぼる。

「帯広の森事業はもちろん大切だが、市民が犠牲になるようでは駄目だ。他の都市公園や児童公園は草ぼうぼう。照明設備が無かったり、舗装がボロボロ。

スポーツ施設の森一。国内トップレベルの施設が次々と整備された

総計百五十二万所、八百六十二haで、一人当たり五十一・三平方m。現状は自二十四万所、三百三十六haで一人当たり二十平方mにすぎない。

新庁舎建設やJR帯広駅高架化と周辺整備事業

駅高架化と周辺整備事業がめじろ押しで、市の財政は今後も厳しい。財政の健全度を測る目安の一つ、地方債制限比率は既に一五%を超え危険信号が点滅している。

現市長の高橋幹夫氏は昭和五十三年から二年間、公園緑地課で用地買収を担当していた。

「雄大なスケールの構想をつぶしてはいけない。日高山脈を緑の発電所に例えるなら、帯広の森は緑の変電所。きちんと整備しないとマチに緑がこない」（高橋市長）

新市長は「森」づくりに並々ならぬ意欲をみせているが。

北海道新聞
平成２年６月17日

検証・帯広の森

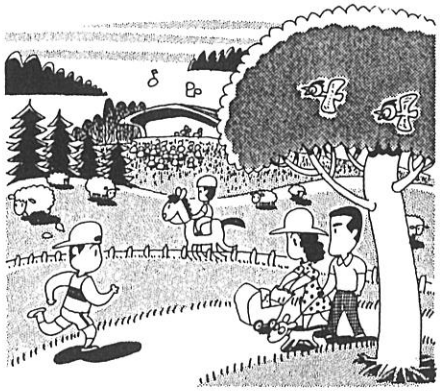
◎5◎

提言

だれも親しめる場に

自然守って造成を 管理棟に展望台も 皆で育てる心こそ

緑まち未来



選挙・管理や財政問題など難問が山積する帯広の森。打開の道はあるのか。その方策は。取材中に多くの人々からさまざまな意見、アイデアが寄せられた。「羊を放牧しては」「川とつなげたマラソン・サイクリングコースを」「乗馬コースも欲しい」「とりあえずシンポジウムで市民の総意を再確認すべきだ」。これらを森に対する十人の提言にまとめてみた。

野洲健治・十勝自然保護協会会長

雪うと荒らされるので内証の話ですけどね、森の中にはスズランなどの群生地もあるんです。貴重な野草を守りながら造成を続けていってほしい。ちょっと怒になるのは、駐車場が少ないこと。運動施設が揃えているので森のスペースがなくならないかと心配だ。

鯨岡寛正・川西農協理事

下草刈りが問題になっていますが、私は二年前から羊の放牧を提案している。牧歌的な雰囲気で親子連れも楽しめる。羊が草をきれいに食べてくれるし、一石二鳥。自分の林で実施してます。野犬対策など別問題だけど、とりあえず試験的にやってみては。

森について積極的な発言をする小関博利・小関工務店専務

外国のまねをするだけじゃだめだと思うな。昔の計画にこだわることなく、市民の総意を確かめるために討論会やシンポジウムを開いてはどうだろう。市役所も「帯広の森管理事務所」なんかつくって、とりあえず今まで手がけてきた部分は格好をつけてほしいね。

おびひろサケの会会長の西武・帯畜大名誉教授

六年ほど前にウィーンの森を見てきました。バスに乗って森の中を回るんですが、あるのは展望台や記念碑程度。シカやウサギもいて、いい感じでしたよ。十勝川のサーモンパーク構想と連動させて、帯広の森はあくまで自然志向で進めていってほしいなあ。

丹羽清榮・帯広の森を育てる会会長

昨年十月、帯広営林支局や管内の営林署を退職した仲間でボランティア団体「帯広の森を育てる会」をつくりました。せっかく立派な森をつくっているんだから、お子伝いしようということになったんです。平均年齢が七十歳近いのでチェーンソーで木を切るのはもう無理だけど、市から要請があったら、植樹の指導や下かを開くのもいいね。

一回目から植樹祭の裏方を務めてきた元市役所課長の関寛・中道リース常務

これから管理をどうしていくのかがポイントだろうね。風紀上の問題もあるし、野火も心配。管理棟を造って、その上に帯広の町を一望できるような展望室を造ったらどうかと仲間と話したりしてるんですけどね。帯広は馬産地として知られているし、乗馬も盛んなんだから、森の中に乗馬道ができたらいいね。これから乗馬人口は増えると思うし、観光面でもきっと役立つと思います。

◇

人担当記者からひと言▽取材を通じて多くの人々に出会ったが、どの人の意見も熱く積極的。市民の心の中の森は死んでいないことを感じた。今回の企画の趣旨は森を攻撃することではない。百年の大計を成功させるため、ちょっと立ち止まって歩いてきた道を振り返ってみる。そんなきっかけになったら幸いだ。

（彩木和弘）

構想が出発した時、いかに市の担当者や市民有志がこの計画に情熱を傾けたか、取材を通してよく分かった。あの時のエネルギーを無にしないよう、いま市民みんなで改めて森を考える必要があると感じた。（増田聖子）

＝おわり＝

十勝毎日新聞
平成２年10月24日

28日にプレ育樹祭

市民植樹祭実行委員会など 帯広の森の管理を徹底

植樹祭開催以来十六年がたち、植えっ放しのままになっている帯広の森の管理をキチンとしようーと市民植樹祭実行委員会（柳瀬善一委員長）と営林局OBで作る帯広の森を守る会（丹羽清榮会長）は、来年からの本格的育樹祭に備えて「プレ育樹祭」を二十八日午前十時から帯広の森第三ブロックで行う。

帯広の森にこれまでに植えられた苗木の総数は十四万七千本、植樹総面積も七十六・二ヘクタールに及んでいる。植樹祭参加者も年々増え今年は約七千人、十六回を合わせると延べ七万七千人が参加している。

その一方で、下草刈りや枝払いなどの管理が行き届かないため野火の危険性とともに、記念植樹など市民一人ひとりが思いを込めて植えているため間伐に踏み切れず、森林としての成長が妨げられているなどの問題点が年を追うごとにクローズアップされている。また心ない市民による植樹された開町開七線五十二、五十四の帯広の森第三ロック（野球場東側）で下草刈り、下枝払い、密植え部分の移植、ごみ拾いなどを行う。

その前段として、どういう形で進めるかを探るテスト的な意味を持っている。

当日は会のメンバー六十人ほどが出て、昭和五十一年に植樹された開町開七線五十二、五十四の帯広の森第三ブロックの下草刈り、下枝払い、密植え部分の移植、ごみ拾いなどを行う。

ミスタードーナツ
帯広市西一条南10丁目5番地

北海道新聞
平成２年12月13日

ひと

森づくりで合意を

帯広の森シンポの司会を務める 市原 秀朗（いちはら ひでお）さん

公害対策市民会議と緑の十勝会議主催の第一回市民環境シンポジウム、テーマは「どれで良いのか 帯広の森」。十四日午後六時半から、道新コミュニティーホールで開かれる。「このシンポジウムで結論を出すつもりはありません。いろんな意見を出してもらって市民論議をまき起こすきっかけになれば」と行司役として張り切っている。

帯広の森は十六年前、市民の論議を経て誕生した。

「ちょうどそのころ、帯広の十勝会議主催の第一回市民の環境シンポジウム、テーマは「どれで良いのか 帯広の森」。十四日午後六時半から、道新コミュニティーホールで開かれる。「このシンポジウムで結論を出すつもりはありません。いろんな意見を出してもらって市民論議をまき起こすきっかけになれば」と行司役として張り切っている。

帯広の森は十六年前、市民の論議を経て誕生した。

?」という声や『いいことだが、どんな森にしたらいいのか』という意見が出ているのですが、現状は必ずしもかつて描いた理想像にはなっていません。これからの森づくりの進め方をさぐるため、間伐は必要なのかどうか、市民合意が形成できれば」と期待する。

音更町中士幌の生まれで、「野山に囲まれて育った」。だから「帯広の森の構想は感動的でした」。ひとつは普通の人が考えつかない発想であること。二つ目は緑の減少が深刻でなかった時期に環境を守る考えが出たこと」。帯広地区労副議長、四十五歳。

そしている公害対策市民会議も発足したばかりでした。「帯広の森なんて必要ない」という。だから、今、再び論議が必要だと強調する。「当時、吉村市長の計画は壮大すぎて縮小しての実施となったのです。

十勝毎日新聞
平成２年10月29日

マツの枝払い やごみ拾い

帯広の森市民育樹祭準備会

来年の育樹祭に向けて作業内容などを検討しようと、帯広市民植樹祭実行委員会主催の「帯広の森育樹祭準備会」が二十八日午前十時から、帯広の森球場東側の昭和五十年第二回帯広の森市民植樹祭会場で行われた＝写真。

この日作業に参加したのは同実行委員会のほか、帯広の森を育てる会、国土緑化推進委員会十勝支部のメンバーと帯広営林支局、帯広営林署、十勝支庁、帯広市の職員ら約七十人。七、八メートルほどにも成長したトドマツの枝払いや下球場研修室に移して意見交換。実際の作業を通して、内容や安全性などを検討した。

今回のデータを基に来年度は一般市民が参加できる育樹祭が開催される見込みだ。

北海道新聞
平成２年12月17日

百年を見つめて

続・検証 帯広の森

▷1

〈提言者〉
帯広の森市民植樹祭実行委事務局長　山田　哲氏
帯広市施設見学ガイド　久保　紀子氏
十勝自然保護協会会長　野洲　健治氏
司会　公害対策市民会議副会長　市原　秀朗氏

市民の手で森をつくろうという壮大な夢が動き始めて十六年。今年はかつてないほどに森づくりを再検証し、考える機運が市民の間で高まった。各種のシンポジウムに加え、森の色や音を探し、森とのふれあいを求める試みも生まれている。百年先を見つめながらさまざまな形で森とかかわった市民の模索を振り返る。

今月十四日の夜、帯広市内の通産ホールで帯広の森を考える第一回市民環境シンポジウムが開かれた。多様な立場の市民が参加し、森づくりについての意見をぶつけ合ったシンポジウムを抄録する。今回は三人のパネリストの発言要旨を紹介する。

市原　まず三人の方から民意を受け、その後、会場からの意見を受けたい。

山田　第一回植樹祭から事務局長をやっている。みんなでつくろう帯広の森―を合言葉に実施してきた。五回目に現在の植樹パター念植樹として参加した人もいるが、いかに間伐（抜き切り）をするか市民合意をとりつけたい。来年からは植樹だけでなく育樹祭も実施したい。植樹に参加した団体、個人に手紙を出して現地に入って見てもらい、間伐、除伐の是非を話し合ってほしい。百年の森づくりを考えてきて、まだ植樹祭は十六回、あと八十四回残っているのだから議論が重要だ。

久保　市の施設見学のガイドをしているが、帯広の森は必ず訪れるようにしている。いつも見学者に話すのは人植から百年で原始林を復活して、百年でもとに戻すという スケールの大きな構想だ ーということ。見学者の話を聞くと、「帯広の森というとまず運動公園を思い出す」という。見学者には婦人が多いが、婦人は帯広の森に来てもすることがない。緑ケ丘公園なら百年記念館もあるし、散歩もできるが、帯広の森は運動施設があるだけで、施設周囲の地面はコンクリートだし、ベンチもゴミないという声が多い。山田さんはまだ十六年というが、私はもう六年と思う。芝やベンチ、トイレ、くつろげる場所があれば、「遠足にいくなら帯広の森」と定着するはず。もう少し歩かせるくらめば、いろいろな協力者が増えるのでは。

野洲　私はちょっと角度を変えて話したい。木を植えるのは太だけでなく、下からも、虫も、鳥も関連していることだ。人間が木の身になってみることが大切だ。愛情を前提に考えれば間伐の問題も解決する。密植は共倒れしやすい弱い木を育てている。人間のひとりよがりで木をいじめているのだ。木を植えるには木の性質も研究しなければならない。シラカバは六十年で枯れてしまう。だから枯れる前に別な木が大きくなっているようにしなければならない。また帯広の森周辺はもともとカシワやアカダモがあった土地。それを考えて針広混交林にしようとしているのは賛同なことだ。その土地がどんな木が好きかを考えて植えれば十勝にふさわしい森になり、鳥も来てバードウオッチングもできるようになるだろう。

シンポジウムから〈上〉

市民合意得て間伐を 山田氏
久保氏 くつろげる場所作れ
草木の立場で考える 野洲氏

ンができるまでは、試行錯誤の連続だった。昭和五十二年から五十三年は植樹密度を一メートル間隔にしたので、現在、横枝が伸びて共倒れの危険が出ている。今、市民に議論してもらい、健全なかたちに戻したい。植樹祭には記

山田　哲さん

久保　紀子さん

野洲　健治さん

緑　まち　未来

北海道新聞
平成２年12月18日

百年を見つめて

続・検証 帯広の森

▷2

シンポジウムから〈下〉

「間伐ではなく移植を」「PR、指導者共に不足」

市原　今回のシンポジウムでは提状への意見もあるだろうが、これからどうするかに焦点をしぼって意見をうけたい。

中村礼子（帯広市西三南二九）

帯広の森の計画はすばらしいと思うが、素人目で見ても木が込み過ぎている。「記念に植えた木を切るな」という投書があるというが、植えるのは個人でも、植えた後は公共的なものと考え、みんなで育てるべきは、それと、もうひとつ、森の中にある植樹した団体の看板、あれはばすすか、もう少し小さいものにしては…。

丹羽清美（音更町木野南一六）　植えてしまったら公共で世話をしないとの準備会を行った、かまぼこ下草を刈るのは危険とはいうが、慎重にやればたいが、五十年の間伐（抜き切り）計画はあるのか。

市原　今回は主敵のやり方よりも市民サイドで森のあり方の総意を練り上げたい。

米田元春（帯広市西一四南二）　間伐ではなく移植するというアイデアはどうか。労力と金はかかるが機械力を用いれば無理ではない。切って捨てるのではなく他に移すのを提案する。

山田英和（帯広市西七南一六）　十月に育樹祭の準備会を行った。かまぼこ下草を刈るのは危険とはいうが、慎重にやればたいが、五十年の間伐（抜き切り）計画はあるのか。

市原　今回は主敵のやり方よりも市民サイドで森のあり方の総意を練り上げたい。

米田元春（帯広市西一四南二）　間伐ではなく移植するというアイデアはどうか。労力と金はかかるが機械力を用いれば無理ではない。切って捨てるのではなく他に移すのを提案する。

内若草町）　植樹、育樹ともに進めるには専門的知識が必要、事前に検討の林では十年以上居れ葉が堆積して昆虫も小動物もおらず、もはや森とはいえない。北側に防風林を造ってから植樹したほうが良い場所もあり、池はあるのに草がないのでカモの逃げ場がないなど、人工的に手を加えなければならないところがある。

横野　忠（帯広市東九南一四）　どのような形で育樹祭をつくっていくのか。私は市民に間伐ができるとは思わない。できるのは下枝払いぐらいだ。人間が手を加えた森は人間が処理しなければならない。最後まで始末をしよう。また針葉樹の林では十年以上居れ葉が堆積して昆虫も小動物もおらず、もはや森とはいえない。北側に防風林を造ってから植樹したほうが良い場所もあり、池はあるのに草がないのでカモの逃げ場がないなど、人工的に手を加えなければならないところがある。

清水隆典（帯広市東七南一〇）　手で一本ずつ植えたものを切りたくないのはわかるが、このままでは自然とうたの前に森が消滅する。

梅根もと子（帯広市稲田町）　今日は専門家が多いので間伐の方法論が出ているが、市民に間伐を理解してもらうためPRが必要だ。

市原　論議が間伐にのめり込む感があるが、最後に帯広市の考えを渡辺利雄帯広市建設部長から…。

渡辺　想像をこえる関心とアイデアに感謝している。意見は来年度予算に反映させる努力をしたい。間伐には費用論もあるが、移植は機械もあるようなので可能な場所では取り入れたい。密植した地区を専門家に見せたら「今、全滅してもおかしくない」といわれた。専門職員がいないのもこうなった原因かと思うが、責任ある仕事を続けたい。PRについては植樹祭の印刷物に間伐の可能性があることを明記したい。

森づくりのアイデアが出された帯広の森シンポジウム

第一回市民環境シンポジウム「これで良いのか帯広の森」（14日、道新コミュニティーホール）抄録

司会　公害対策市民会議副会長　市原　秀朗氏（文中敬称略）

緑　まち　未来

北海道新聞
平成２年12月19日

百年を見つめて

続・検証 帯広の森

▷3

森にふれて

市民が現地を見学

枝打ち体験、育林策検討

今年は帯広の森について考えるため、まず実際の森の姿を見ようという試みも相次いだ。帯広デザイン振興協議会は七月二十七日にシンポジウムを開いた後、九月二日に帯広の森を歩く会を開催。十一月二日には市緑化審議会が森の見学を行った。

市民が現地を見学した。運動施設以外の森もらえる。もっと市民が森を訪れ、散策など多くの人が森に親しむようになれば、こみ合ってくるのは当然だ。

森づくりが転機を迎えていることは各種のシンポジウムでも指摘されている。初期の植林区では植え方のまずさから密植が目立ち、良い森を育てるためには間伐をすべきだという専門家が多い。

帯広市はこれまで、植樹には積極的に取り組んで来た。この日、作業を体験した大人の間からも「予想以上に作業が難しい」「枝を捨てる人もなくなると思う」と委員のキャンペーンを行われた懇談会では活発な意見が出された。

「帯広の森というと運動施設しか思い浮かばなかったが、実際に歩いて見ると予想以上に素晴らしかった。あれから、お客さんが来ると森へ出かけており、とても楽んでいる。

当日の懇談会で専門知識を持つ委員は間伐などの手入れの必要性を指摘した。「植える樹種について」も「もっと土地に合ったものを選ぶべきだ」などの意見が出された。

そんな中で帯広の森市民植樹祭実行委員会が十月二十八日に育樹祭準備会を開いた。来年以降の育樹祭開催に向け、枝打ちなどの作業を体験してみようという試みも意見が多く出された。

森づくりが転機を迎えていることは各種のシンポジウムでも指摘されている。初期の植林区では植え方のまずさから密植が目立ち、良い森を育てるためには間伐をすべきだという専門家が多い。

帯広市はこれまで、植樹には積極的に取り組んで来た。この日、作業を体験した大人の間からも「予想以上に作業が難しい」「枝を捨てる人もなくなると思う」と委員のキャンペーンを行われた懇談会では活発な意見が出された。

当日の懇談会で専門知識を持つ委員は間伐などの手入れの必要性を指摘した。「植える樹種について」も「もっと土地に合ったものを選ぶべきだ」などの意見が出された。

そんな中で帯広の森市民植樹祭実行委員会が十月二十八日に育樹祭準備会を開いた。来年以降の育樹祭開催に向け、枝打ちなどの作業を体験してみようという試みも意見が多く出された。

森づくりが転機を迎えていることは各種のシンポジウムでも指摘されている。初期の植林区では植え方のまずさから密植が目立ち、良い森を育てるためには間伐をすべきだという専門家が多い。

帯広市はこれまで、植樹には積極的に取り組んで来た。この日、作業を体験した大人の間からも「予想以上に作業が難しい」「枝を捨てる人もなくなると思う」と委員のキャンペーンを行われた懇談会では活発な意見が出された。

当日の懇談会で専門知識を持つ委員は間伐などの手入れの必要性を指摘した。「植える樹種について」も「もっと土地に合ったものを選ぶべきだ」などの意見が出された。

そんな中で帯広の森市民植樹祭実行委員会が十月二十八日に育樹祭準備会を開いた。来年以降の育樹祭開催に向け、枝打ちなどの作業を体験してみようという試みも意見が多く出された。

森づくりが転機を迎えていることは各種のシンポジウムでも指摘されている。初期の植林区では植え方のまずさから密植が目立ち、良い森を育てるためには間伐をすべきだという専門家が多い。

帯広市はこれまで、植樹には積極的に取り組んで来た。この日、作業を体験した大人の間からも「予想以上に作業が難しい」「枝打ちなどは専門家に任せ、市民はこみ合いやできることをするほうがいいのでは」といった感想が聞かれた。

「確かに難しい点はあるが、半面、枝を払った後の林の中は風通しがよくなってとても気持ちがよく、いい勉強になる。森づくりは人づくりという面があるので、森と森づくりにかかわる市民の意識を熟成していけるような催しを企画していく必要がある」と実行委事務局の山田英和さん。

実行委ではさらに論議を重ね、育樹祭の時期や規模を検討していく。今年、森を訪れたそれぞれの団体の人たちにとって、自分の目で現地を見、肌で森にふれたことは明日につながる体験となったようだ。

森を見学する緑化審議会の委員たち＝11月2日

緑　まち　未来

北海道新聞
平成２年12月20日

百年を見つめて

統・検証 帯広の森

▷4

デザインの試み

風や森の音生かす

色、味でもイメージ作り

帯広の森の体育館南に今月、一風変わった電話ボックスが完成した。「森づけられたこのボックスには屋根がない。しゃれた四本の柱の上に緑の三角屋根がのっているだけ。電話をかける人が風を感じ、森の音を聞きながら話してほしいと考え、開放的なデザインにした。

森の電話を企画したのは帯広デザイン振興協議会（山田若会長）。森にマッチした造形の試作品としてプランを練り、帯広の広業商高度利用技術開発研究会（山本利秋会長）と共同で製作した。木目のぬくもりを生かし、ベンチ代わりに座って休むこともできる造りで、さん新なデザインが光る。

「電話ボックスに限らないが、町中どこへ行っても同じデザインじゃつまらないし、その場所や空間に合うデザインの試みがあっていいはず。森やファッション、BGM、料理などに挑戦し、色、形、音、味と多彩なアプローチを行っている。

色を担当する佐野まさのさんはデザイナー仲間らと森を歩き、ゴールドニセアカシアのまばゆい緑にひきつけられた。「自然の中に潜んでいる色は既存のインクには見つからない。森の色や音をつくる試みは初めてだし、新鮮でおもしろい」と話す。

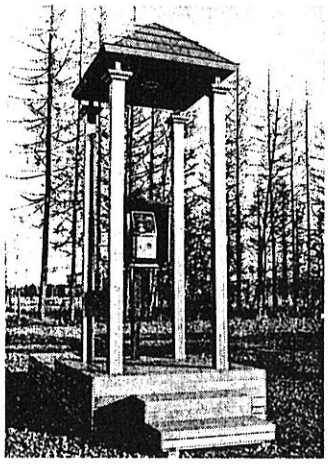
佐野さんのグループは森から空、大地へと対象を広げ、将来は十勝の色を提案していく考え。

「百年たっても使い続けられる色がいくつかあれば、それが風土に合った色だと言えるんじゃないか」と長い目で自分たちの試みを見つめる。

ふく井ホテル料理長の長屋壮亜さんはアドバイザーとして「森の料理」にかかわっており、十月二十一日には屋外で試食会を開いた。「ヨーロッパでは森の広間にレストランがあって食べることを楽しめる。僕たちは森に合う料理を研究するが、逆に食べたり遊ぶことが似合うような森づくりをしてほしい」と行政に注文をつける。

今月十七日に開かれた同協議会の会議の席ではチロリアンハットに近いデザインの「森の帽子」の案が提示され、森をイメージするBGMも披露された。来年はこれらの成果をまとめた絵本を作る計画もある。

植樹を重ね、少しずつ森が育ってくると次はどうやって森に親しむか、ソフト面の充実や豊かさが問われる。実り多い森とのつきあいを目指して同協議会の模索は続いている。



森の音や風を感じられる電話ボックス

緑 まち 未来

北海道新聞
平成２年12月21日

百年を見つめて

統・検証 帯広の森

▷5

青年期へ

育て磨きかけよう

市民団体の取り組み活発

森とのふれあいを求める動きも活発になってきた。市民グループ、エゾリスの会（藤巻裕蔵会長）は今年、雷士フィルムグリーンファンド（略称FGF）の助成を受けることが決定。これを使って帯広の森に野生動物の観察小屋を建てる計画を進めている。

エゾリスの会は帯広の森の中でもっと散策や自然観察を楽しめるよう、市に対して園路の整備を要望する考えで、来年早々にも提言書をまとめる。観察小屋には将来、指導員を常駐させ、訪れる市民に野生動物の見方やマナーを説明することを検討している。

「外国人は散策や乗馬、釣りをしてのんびりと緑の中で過ごすのが好きだが、日本人はガンガン歩くのが好きだ」と村田会長。同クラブでは野球場の東側から空港南町まで周回する四キロのコースを考えており、来年一月十五日にオープンさせる計画だ。

市民サイドからの活発な取り組みを受け、帯広市も森の整備計画を見つめ直す作業を進めている。冬に森と親しもうという試みもある。帯広クロスカントリースキークラブ（村田博会長）はこの冬初めて帯広の森に歩くスキーの林間コースを造り、一般に開放する意向。十二月に村田会長らが森に入り、コースの設定を行った。

「調査に入ったら、予想以上に素晴らしい雰囲気で驚いた。北欧などの森の中にスキーのコースがある。帯広の森もせっかくできつつあるのだから、積極的に使っていいんじゃないか」と村田会長。同クラブでは野球場の東側から空港南町まで周回する四キロのコースを考えており、来年一月十五日にオープンさせる計画だ。

市民サイドからの活発な取り組みを受け、帯広市も森の整備計画を見つめ直す作業を進めている。

冬に森と親しもうという試みもある。帯広クロスカントリースキークラブ（村田博会長）はこの冬初めて帯広の森に歩くスキーの林間コースを造り、一般に開放する意向。十二月に村田会長らが森に入り、コースの設定を行った。

「調査に入ったら、予想以上に素晴らしい雰囲気で驚いた。北欧などの森の中にスキーのコースがある。帯広の森もせっかくできつつあるのだから、積極的に使っていいんじゃないか」と村田会長。同クラブでは野球場の東側から空港南町まで周回する四キロのコースを考えており、来年一月十五日にオープンさせる計画だ。

市民サイドからの活発な取り組みを受け、帯広市も森の整備計画を見つめ直す作業を進めている。

今年は市民が森づくりに参加する。市公園緑地課の安部勝雄課長は「十六年間、植林してきた成果が目に見えるようになり、市民の中に森に手を加えていこうという意識が芽生えてきた。もう一度森づくりの原点に立ち返り、森のあり方を見直す時期に来ている」と一年を振り返る。

市は来年、従来の植樹を考え、森とかかわろうとする試行がかつてないほどに生まれた。半面、森に対する市民の思いは多様で、間伐や植樹についてもさまざまな意見が出るところに難しさがある。森をいくつかの特色あるゾーンに分け、異なる整備をしてはどうかという提案もある。

「森づくりは百年のうちの十六年目で、人間の人生で言えば青年期に入るところ。これからはただ植える段げではなく、育て、磨きをかけていかなければ」と安部課長。土台をつくる少年期から手入れをする育樹祭を開催するほか、森の現況などを市民に伝えるPRに力を入れる方針。森のグランドデザインの再検討や園路計画の立案も急務となっており、市民の間からは市役所に帯広の森の担当課を設け、専門職員の配置を望む声が強まっている。

来年の育樹祭開催に向け、今年は市民が枝打ちなどを体験した

＝10月28日

この企画は本間康裕、森川麗両記者が担当しました。

今年、将来に思い悩み自分の道を探す青年期へ一大きな転機を内に抱えつつ、帯広の森は新しい年を迎える。

（おわり）

緑 まち 未来

十勝毎日新聞
平成２年12月15日

“百年の森づくり”へ活発論議

間伐問題などで活発な論議が続いたシンポジウム

初の帯広の森シンポ

貴重な提言相次ぐ

間伐で健全な形に 山田氏
憩える場所へ努力 久保氏
“木の身”になれ 野洲氏

市民手づくりの森として知られる帯広の森のあり方を考える、第一回市民環境シンポジウム「これで良いのか帯広の森」が十四日夜、帯広市内の道新ホールで開かれた。「同森の管理・間伐、育樹方法などを論議、とりわけ必要性が指摘されながら、その市民合意が大きな課題となっている間伐については「切って捨てるのではなく、移植という方法を考えてほどうか」「なぜ必要なのかのPRをもっと市民にすべきだ」など具体的な提言が相次いだ。

同シンポジウムは、地元市民団体の公害対策市民会議（西武会長）と緑の十勝会議（神本三也議長）が主催。環境問題に関する市民論議の火付け役に一と初めて企画され、同森を育てる会員ら市民約八十人が参加した。

冒頭に、市の公園緑地課担当者が帯広の森の現況をスライドを交えて紹介。この十六年間で植えた苗木が十四万七千本に達する一方、その一本一本に、植えた市民の愛情が込められているため、間伐に踏み切れない實則面での問題点などを説明した。

これを受けてシンポジウムに入り、提言者の帯広の森市民植樹祭実行委事務局長の山田哲氏、市の施設学芸員の久保紀子氏、元野草園運営委員長の野洲健治氏が順に意見発表、「間伐が特に急がれるのが植樹ピッチ（二×三㍍）に移ったが、間伐問題では、植樹自体は個人の記念でも植えたあとは公的なもの。百年の森づくりへ理解取りつけの努力をすべき」と必要性を訴えた。森のイメージを変える努力を」「久保氏」、「植樹は一人ひとりが“木の身”になることが前提。植える木の性質や元の生育種などの把握を」「野洲氏」と述べた。

このあと会場との意見交換に移ったが、間伐問題では、植樹自体は個人の記念でも植えたあとは公的なもの。百年の森づくりへ理解取りつけの努力をすべき」と必要性を訴えた。森のイメージを変える努力を」「久保氏」、「植樹は一人ひとりが“木の身”になることが前提。植える木の性質や元の生育種などの把握を」「野洲氏」と述べた。

このあと会場との意見交換

市民手づくりの森として知られる帯広の森のあり方を考える、第一回市民環境シンポジウム「これで良いのか帯広の森」が十四日夜、帯広市内の道新ホールで開かれた。「同森の管理・間伐、育樹方法などを論議、とりわけ必要性が指摘されながら、その市民合意が大きな課題となっている間伐については「切って捨てるのではなく、移植という方法を考えてほどうか」「なぜ必要なのかのPRをもっと市民にすべきだ」など具体的な提言が相次いだ。

同シンポジウムは、地元市民団体の公害対策市民会議（西武会長）と緑の十勝会議（神本三也議長）が主催。環境問題に関する市民論議の火付け役に一と初めて企画され、同森を育てる会員ら市民約八十人が参加した。

冒頭に、市の公園緑地課担当者が帯広の森の現況をスライドを交えて紹介。この十六年間で植えた苗木が十四万七千本に達する一方、その一本一本に、植えた市民の愛情が込められているため、間伐に踏み切れない實則面での問題点などを説明した。

これを受けてシンポジウムに入り、提言者の帯広の森市民植樹祭実行委事務局長の山田哲氏、市の施設学芸員の久保紀子氏、元野草園運営委員長の野洲健治氏が順に意見発表、「間伐が特に急がれるのが植樹ピッチ（二×三㍍）に移ったが、間伐問題では、植樹自体は個人の記念でも植えたあとは公的なもの。百年の森づくりへ理解取りつけの努力をすべき」と必要性を訴えた。森のイメージを変える努力を」「久保氏」、「植樹は一人ひとりが“木の身”になることが前提。植える木の性質や元の生育種などの把握を」「野洲氏」と述べた。

このあと会場との意見交換

十勝毎日新聞
平成２年12月17日

これで良いのか帯広の森
市民環境シンポから
基調提言
＜上＞

密植部に共倒れの危険 山田氏
憩いの場として浸透を 久保氏
樹種の性質もっと研究 野洲氏

市民手づくりの森として知られる帯広の森のあり方を考える、第一回市民環境シンポジウム「これで良いのか帯広の森」が十四日夜、帯広市内の道新ホールで開かれた。「同森の管理・間伐、育樹方法などを論議、とりわけ必要性が指摘されながら、その市民合意が大きな課題となっている間伐については「切って捨てるのではなく、移植という方法を考えてほどうか」「なぜ必要なのかのPRをもっと市民にすべきだ」など具体的な提言が相次いだ。

シンポジウム開会の午後六時半、六十席ほどを用意した会場は参加者でたちまちいっぱいになり、主催者側が慌ててイスを運び込むなど、市民の高い関心を裏付けた。

前方の“ひな壇”には、コーディネーターの市原秀朗さん（公害対策市民会議副会長）を中心に、三人の提言者と市民の意見発表、市の説明にお詫めて、

安部勝産公園緑地課長が顔を並べた。提言者は植樹祭実行委員会事務局長として当初から森づくりにかかわる山田哲さん、市の施設見学案内者の久保紀子さん、元野草園運営委員長で植物に詳しい野洲健治さんで、なかなか興味深い顔ぶれだ。

前方の“ひな壇”には、コ

が、早速、シンポジウムが始まった。

冒頭に市担当者による現況説明。スライドを背に立った

須賀重雄公園緑地課長補佐は、この日の大きな論議の柱である間伐問題について「植樹ピッチ（二×三㍍）設定前に植えた昭和五十一―五十三年の所が急がれている。当面はこれを踏まえ、「百年の大計とはいえ、もう十六年もたった、森の中にもっと憩える場所があって、そのイメージが浸透すれば、いろいろな形で市民の協力も得られるはず」とシンヤリ。

また、続く野洲さんは植物の専門家らしく、植生問題も交えて提言、「帯広の森は一度開拓したところに再び木を再生しようという壮大な計画だが、植樹するなら“木の身”にならないとうまくいかない。例えば植える樹種の性質をもっと研究し、元

定時間よりやや遅れた

虫害の問題を含めて共倒れの危険性がある。当面はこれを踏まえ、市民が愛情を持って植え、健全な形に戻していかなければならないだろう。問題はこの市民合意の方法だが、植樹間隔に一本とかなり狭く、間伐の必要性は以前から指摘されてきたところだ。

「市民は運動公園が帯広の森であると感じている」と謙虚な感想を披露したのが、一番手の久保さん。市の施設案内で帯広の森を紹介した経験を踏まえ、「百年の大計とはいえ、もう十六年もたった、森の中にもっと憩える場所があって、そのイメージが浸透すれば、いろいろな形で市民の協力も得られるはず」とシンヤリ。

また、続く野洲さんは植物の専門家らしく、植生問題も交えて提言、「帯広の森は一度開拓したところに再び木を再生しようという壮大な計画だが、植樹するなら“木の身”にならないとうまくいかない。例えば植える樹種の性質をもっと研究し、元

このあと、提言者が順に意見発表、市の説明にお詫めて、

は、この日の大きな論議の柱である間伐問題について「植樹ピッチ（二×三㍍）設定前に植えた昭和五十一―五十三年の所が急がれている。当面はこれを踏まえ、「百年の大計とはいえ、もう十六年もたった、森の中にもっと憩える場所があって、そのイメージが浸透すれば、いろいろな形で市民の協力も得られるはず」とシンヤリ。

また、続く野洲さんは植物の専門家らしく、植生問題も交えて提言、「帯広の森は一度開拓したところに再び木を再生しようという壮大な計画だが、植樹するなら“木の身”にならないとうまくいかない。例えば植える樹種の性質をもっと研究し、元

五十一年（市民植樹祭第一回）から三万年の植樹分は面積十三ヘクタール三万九千本、ことについては参加者の急増などを背景に植樹のピッチが「狭い間隔に一本とかなり狭く、間伐の必要性は以前から指摘されてきたところだ。

「市民は運動公園が帯広の森であると感じている」と謙虚な感想を披露したのが、一番手の久保さん。市の施設案内で帯広の森を紹介した経験を踏まえ、「百年の大計とはいえ、もう十六年もたった、森の中にもっと憩える場所があって、そのイメージが浸透すれば、いろいろな形で市民の協力も得られるはず」とシンヤリ。

また、続く野洲さんは植物の専門家らしく、植生問題も交えて提言、「帯広の森は一度開拓したところに再び木を再生しようという壮大な計画だが、植樹するなら“木の身”にならないとうまくいかない。例えば植える樹種の性質をもっと研究し、元

きるだけ足を運んでもらって任せるべきとの倶論論議まで出まさまだ」と述べ、市民合意の難しい側面を投げかけた。

現状を伝え、植樹時に限らず、いろんな形で論議を進めていくことが必要だ」。

提言する３氏。上から山田さん、久保さん、野洲さん

カラープリント1時間仕上
エースフォート
帯広市西4条南9丁目TEL0155-

はそこに何の木が生えていたのかなども考えてほしい。間伐の問題も、そうすれば自然と整理がつくはずだ」と熱っぽく提言した。（つづく）

十勝毎日新聞
平成３年１月15日

帯広の森〝間引き〟

植樹から育樹へ　間伐作業スタート

密植で生長が妨げられている木を間引きして森を大きく育てようーと、十一日から帯広の森の間伐作業がスタート

植える森から育てる森への転換で、切られる木はすべて記念植樹で植えられたものだが、間伐が行われるのは初めて。

「当初予想された市民からの反発は意外なほど少なかった」（市公園緑地課）という。

市が間伐した場所は昭和五十一年に第二回植樹祭で植えられた南町南七線五四（帯広の森野球場東側）の三・四ヘクタール。植栽ピッチが一メートル×一メートルと狭かったため人が入れないまでに成長しているもののひょろひょろとした感じ。

小林
レンタカー
グループユニック付
0155(42)5858

間伐した木をチップにする作業員

枯れかけた枝、背丈二メートルの未成長の小木…。十一日から行われている帯広の森の初の間伐作業。そこで見た密植樹木の姿は、市民植樹の開始以来十七年間、「植える」だけで「育てる」ことを見過ごしてきた現実を浮き彫りにしていた。

（帯広・報道部　佐藤　正義）

間伐場所となった昭和五十一年のアカエゾマツの枝が無数に重なり合い、奥は一メートル先も見えない。中に入ると目が差し込まず雑草すら生えないのだ。

隣接する同年のトドマツ植樹区へ。高さ十メートルにトドマツ、アカエゾマツが成長している。横枝や根の伸びが阻害されているため樹高はせいぜい七メートルになっているもののひょろひょろとした感じ。

昨年行ったシンポジウムやプレ育樹祭でも「このままいけば共倒れになり、森が育たない」と強い指摘があり、間伐に踏み切った。対象地は五十一―五十三年に植えた十三ヘクタールで、今年から三年かけて三万九千本の木の三割を間引きする計画。

この日間伐されたのは二十日に初の育樹祭が行われる場所で、手法は人が入り下枝払いなどが容易にできるようにする列状間伐。市職員が見守るなか、業者がチェーンソーで切り倒したトドマツをウッドチッパーで見る間にチップ状にしていた。

市ではこのチップを森に散布して肥料にしていく考え。また間伐材を砕いて遊歩道のさくやキノコのホダ木やコースターをつくる。「市民が思いを込めて植えた木なので森のなかで有効に使っていきたい」と市公園緑地課では話している。

北海道新聞
平成３年10月15日

森づくりへ初の間伐作業

帯広の森

アングル

17年間密植し放置

市民は「育てる」意識を

間伐場所となった昭和五十一年のアカエゾマツの枝が無数に重なり合い、奥は一メートル先も見えない。中に入ると目が差し込まず雑草すら生えないのだ。

隣接する同年のトドマツ植樹区へ。高さ十メートルにトドマツ、アカエゾマツが成長している。横枝や根の伸びが阻害されているため樹高はせいぜい七メートルになっているもののひょろひょろとした感じ。

枯れかけた枝、背丈二メートルの未成長の小木…。十一日から行われている帯広の森の初の間伐作業。そこで見た密植樹木の姿は、市民植樹の開始以来十七年間、「植える」だけで「育てる」ことを見過ごしてきた現実を浮き彫りにしていた。

（帯広・報道部　佐藤　正義）

ったく枝があちこちに目につく。

「どらんなさい。草も生えていないでしょう」と作業員が林の下を指差す。きれいに地表が顔を出している。日が当たらない下枝があちこちに目につく。

「どらんなさい。草も生えていないでしょう」と作業員が林の下を指差す。きれいに地表が顔を出している。日が当たらない下枝があちこちに目につく。

幹の直径が十五センチにも達する木の横に、わずか一メートルほどの小木が…。植樹から十五年にして立木同然。まったくといっていいほど育っていない。「植えっぱしじゃあね。もう一度植えたのに」「あくまでも自然にまかせるべきだ」といった反対論も市民の間にあり、意見に当たる市をためらわせてきた。

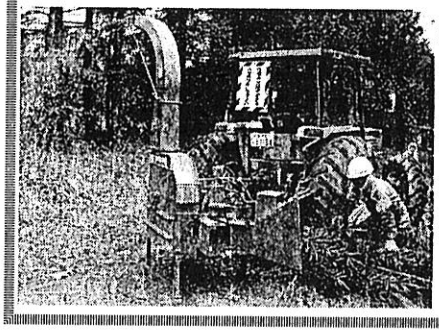
しかし、専門家の一人は言う。「木を育てるには、まず密植して伸長成長を促し、その後、間伐して肥大成長させるのが常識です」。こうしたセオリーを何人の市民が知っていたか。もっと早くから市民の意識への浸透が図られていれば…。

一般的に「十―十五年で二回」といわれる間伐。帯広の森では三、四年前から、市民団体などが、その必要性を訴えてきた。

「確かに専門家との協議も足りなかったし、コンセンサスづくりも後手に回ってしまった。反省する部分はある」と佐部勝洋市公園緑地課長。市では昨年十月のプレ育樹祭を皮切りにシンポジウム、市広報紙などで市民への意識づくりを図る。

今回の間伐に対して「抗議などは、今のところない」という。

今月二十日には初の育樹祭が予定され、市民の手による「育てる森」の取り組みも始まる。十七年目にして本当の「森づくり」がスタートするのだ。



帯広の森の初の間伐作業。間伐された木はチップ化され肥料として散布される